

第 4 部

資 料

第 1 章

国際生命情報科学会

International Society of Life Information Science
(ISLIS)

本学会は、こころや精神を含む、
21 世紀の科学技術の新パラダイム（枠組）を切り開くために、
気功や潜在能力などの科学的研究を
苦勞して行っていた研究者によって 1995 年に設立された。
初代顧問・役員は 13 名のみで、
2004 年現在は 16 名の外国人を含む 67 名（評議員含む）へと発展して来た。
会員は約 10 カ国に 220 名と規模は小さいが、日本発の情報を多く発信し、
国際的に活発に活動してきた。海外に 8 ヶ所の情報センターもある。
設立以来、年 2 回の「生命情報科学シンポジウム」を春、夏に主催し、
2004 年 3 月で 17 回目を開催。
国際学会誌、*Journal of ISLIS* (和訳付)も年 2 号を完全定期刊行中。
2002 年 8 月には「潜在能力の科学」国際フォーラムを成功させた。
その成果を発展させるために、2004 年 8 月 26 日～29 日には、
韓国ソウルにて、「心と体の科学国際会議」を主催する。

International Society of Life Information Science (ISLIS)

国際生命情報科学会

趣 意 書

20世紀の科学・技術は、主として意識・精神・心から独立した物質世界を研究対象としたパラダイム（枠組）を築き、その範囲内での成果を納めてまいりました。

しかし、20世紀のパラダイムの成果あるいはその延長ではとても説明できそうにない現象が、意識・精神・心が関与する分野などでは現実に存在している可能性が指摘されております。

本国際学会は、国際的英知を結集し、その未知な現象を科学的実証に基づき明確化させ、その特性と、原理の解明をめざし、21世紀の科学・技術の新パラダイムを切り開き、科学・技術の革新ひいては人類の平和な文化と福祉の向上へ寄与することを趣意といたします。

真に科学的実証に基づき研究する科学・技術者、研究者および学生の皆様の本国際学会へのご入会を切に期待いたします。

また、特殊な能力をお持ちの方（技功会員）や、まじめに本学会の発展をご支援いただける個人および団体（賛助会員）のご入会をお願い申し上げます。

主な研究分野

生体機能、脳生理学、人体科学、気功および「気」、生体放射、健康科学（東洋医学、伝統医学、相補代替医療、統合医療、精神神経免疫学）、潜在能力、各種精神活動、意識、瞑想、超心理現象、感覚外認識、精神的物理現象、生物特異機能、その他

学会誌発行

Journal of International Society of Life Information Science（当年度2回、3月と9月）

学術集会主催

生命情報科学シンポジウム（当年度2回）、国際シンポジウム（数年に1回）、講演会等

International Society of Life Information Science (ISLIS)

顧問 (任期 2002年4月1日~2003年3月31日)

学術顧問

渥美 和彦

日本代替・相補・伝統医療連合会議 理事長
日本統合医療学会 代表
東京大学 名誉教授、鈴鹿医療科学大学 前学長
日本学術会議 会員・第七部会 元部長

稲場 文男

東北大学 名誉教授、東北工業大学 名誉教授
元 日本学術振興会 光エレクトロニクス第130委員会 委員長
元 (株) 生体光情報研究所 取締役・技術顧問

高良 和武

東京大学 名誉教授、高エネルギー加速器研究機構 名誉教授
国際総合研究機構 (IRI) 理事長
(財) 総合科学研究機構 理事長
(学) 筑波研究学園 会長

野辺地 篤郎

聖路加国際病院 元院長
国際総合研究機構 (IRI) 副理事長
日本医学放射線学会 名誉会員
ドイツ・レントゲン学会 名誉会員

湯浅 泰雄

桜美林大学 名誉教授
人体科学会 元会長
トランスパーソナル心理学/精神医学会 顧問
気の医学会 顧問、臨床心理身体運動学会 顧問

渡邊 日章

日本医科大学 名誉教授、日本催眠学会 名誉会長
日本法医学会 名誉会員

陳 信

航天医学工程研究所 教授 (前所長)、中国
国際宇宙科学院 院士

特別顧問

河村 建夫

衆議院議員
文部科学大臣
前 文部科学副大臣
元 衆議院 文部科学委員長
元 法務政務次官

鳩山 由紀夫

衆議院議員
元 内閣官房副長官
元 気の研究会 (人間サイエンスの会の前身) 会長
衆議院 文部科学委員会 委員
衆議院 外務委員会 委員

山本 有二

衆議院議員、弁護士
財務副大臣
人間サイエンスの会 (国会議員の潜在能力研究会) 会長
元 法務総括政務次官、元 自治政務次官
元 衆議院 法務委員長、経済産業委員長

北岡 秀二

参議院議員
参議院 文部科学委員長
人間サイエンスの会 (国会議員の潜在能力研究会) 幹事長
元 法務政務次官
元 参議院 行政監視委員会 理事
元 参議院 国民生活・経済に関する調査会 理事

近藤 鉄雄

(株) 新時代戦略研究所 代表取締役
元 労働大臣、元 経済企画庁長官、元 文部政務次官
元 農林水産政務次官、元 行政管理政務次官
元 衆議院 科学技術委員長

関本 忠弘

(株) 国際社会経済研究所 理事長
元 日本電気株式会社 会長
元 経済団体連合会 評議員会議長

岡崎 久彦

岡崎研究所 所長
元 在サウディアラビア大使、元 在タイ大使

井深 亮

ソニーPCL (株) 専務取締役
(株) エム・アイ ラボ 取締役
日本映像学会 監事、社会福祉法人 希望の家 理事長

丹羽 鞆負

土佐清水病院 院長
丹羽免疫研究所 所長

International Society of Life Information Science (ISLIS)

役員 (任期 2003年4月1日~2004年3月31日)

会長

†伊藤 正敏

東北大学 サイクロトロンRIセンター 核医学研究部 教授

吉福 康郎

中部大学 工学部 理学教室 教授

副会長

†町 好雄 (元会長)

東京電機大学大学院 工学研究科 教授

奥 健夫

大阪大学 産業科学研究所 助教授

†河野 貴美子 (元会長)

日本医科大学 情報科学センター

Kenneth M. SANCIER

(カリフォルニア情報センター長)

Chairman, Board Directors, Qigong Institute

Professor, American College Traditional Chinese Medicine

SRI International (退職)、米国

†樋口 雄三

東京工業大学大学院 理工学研究科 教授

Dean RADIN

(ノエティック・サイエンス研究所内情報センター長)

Laboratory Director, Institute of Noetic Sciences、米国

青木 孝志

(東海支部 支部長)

中部大学 工学部 教授

内山 明彦

早稲田大学 理工学部 教授

Eduard P.A. Van WIJK

(国際生物物理研究所内情報センター長)

国際生物物理研究所 教授、ドイツ

Robert L. MORRIS

Professor, School of Philosophy, Psychology and Language Sciences, University of Edinburgh, スコットランド

華 衛国*

(上海情報センター長)

上海市氣功研究所所長、教授、中国

全 世一

Pochon CHA 大学 代替相補医療大学院 院長、韓国

羅 新

(雲南情報センター長)

雲南大学 人体科学研究室 (前主任) 教授、中国

徐 蘭許

中国人体科学学会 理事長、黒竜江大学 教授、中国

中国人体科学学会 常務理事、中国

理事長

†山本 幹男 (前会長)

放射線医学総合研究所 主任研究員

劉 天君

(北京中医大学内情報センター長)

北京中医大学 教授、中国

常務理事

†小久保 秀之

放射線医学総合研究所 客員協力研究員

朴 玟用

(延世大学内情報センター長)

延世大学 電気・電子工学科 教授、韓国

理事

遠藤 俊吉

日本医科大学 名誉教授

蘇 光燮

(ソウル大学内情報センター長)

ソウル大学 物理学部 教授、韓国

木戸 眞美

東北学院大学 教養学部 教授

監事

平藤 雅之

独立行政法人 農業技術研究機構

モデリング開発チーム長

上田 至宏

関西鍼灸大学 生理学教室 教授

古川 章

放射線医学総合研究所

放射線安全研究センター 主任研究員

佐古 曜一郎

ソニー株式会社 ブロードバンドネットワークカンパニー・FW ラボ 統括部長

†は常務理事会構成員

*2003年7月1日より

International Society of Life Information Science (ISLIS)

評 議 員 (任期 2003年4月1日~2004年3月31日)

特別評議員

帯津 良一
帯津三敬病院 名誉院長
日本ホリスティック医学協会 会長

土屋 喜一
早稲田大学 名誉教授
理工学総合研究センター 顧問研究員

福岡 明
医療法人 社団明徳会 会長
福岡歯科統合医療研究所 所長

村上 和雄
筑波大学 名誉教授
(財)国際科学振興財団 バイオ研究所 所長

柴 剣宇
上海市氣功研究所 教授、中国

吉田 勝志
中部大学 教養教育部 健康科学教室 教授

沈 再文
中京女子大学 健康科学部 教授

梶野 文義
甲南大学 理工学部 教授

古賀 良彦*
杏林大学医学部 精神神経科学 教授

鈴木 昭二
鈴鹿工業高等専門学校 電気電子工学科 教授

中村 泰治**
昭和大学 名誉教授

菅野 久信
(財)エム・オー・エー健康科学センター 生命科学研究所 顧問

新田 和男
(財)エム・オー・エー健康科学センター 研究部 部長

福岡 博史
医療法人 社団明徳会 福岡歯科 理事長

小山 悠子
医療法人 社団明徳会 福岡歯科 専務理事

朱 念麟
雲南大学 物理系 教授、中国

Julie ROUSSEAU
Director of Strategic Development,
Centre for Fundamental and Anomalies Research、英国

* 2003年7月1日より
** 2003年12月1日より

評議員

中沢 正治
東京大学大学院 工学系研究科 教授

別華 薫(Carl BECKER)
京都大学 総合人間学部 教授

伊藤 公紀
横浜国立大学大学院 環境情報研究院 教授

渡辺 恒夫
東邦大学 理学部 心理学教室 教授

木村 真人
日本医科大学 精神医学教室 助教授

足達 義則
中部大学 経営情報学部 教授

賛助会員

団体賛助会員

(株) 七田チャイルドアカデミー
(株) モンテシステム
(株) ワード研究所
(株) オモイガネ
(株) 夢家
三井温熱 (株)
(株) ボンサンテ
日本貴峰道協会

個人賛助会員

近藤 鉄雄 (特別顧問)
山本 有二 (特別顧問)
北岡 秀二 (特別顧問)

宇野 英聖	白井 利宜	金子 薫	今田 学
宮島 剛	時松 佑兒	華山 和彦	朝日 舞
池上 直彦	長沼 雅美	後藤 拓磨	古川 彰久
佐藤 禎花	近藤 瑞枝	小林 充	木村 則昭
青木 太郎	高田 浩	崎村 良夫	高橋 正俊
三国ますみ	北川 弘二	伊藤 周	五井 史子
Anthony WILDE	刑部恵津子	宮下 周平	宮下 洋子
仲田 サク	柳本 和洋	一井 賢	伊原 秀和
黒須 靖史	前田 孝枝		

学会活動の概要

2003年12月1日現在

名称 (略称)	International Society of Life Information Science (ISLIS) 和名：国際生命情報科学会		
設立	1995年	会員数	約220名
顧問・役員・評議員 (外国人数)	66名(16名)	編集委員(外国人数)	6名(4名)
ホームページ	http://wwwsoc.nii.ac.jp/islis/		
本部事務局所在地	263-8555 千葉県稲毛区穴川4-9-1 独立行政法人 放射線医学総合研究所 山本生体放射研究室 内 電話 043-206-3066 FAX 043-206-3069 電子メール islis@nirs.go.jp		
海外情報センター	カリフォルニア情報センター(米国、気功研究所内)		
	上海情報センター(中国、上海市気功研究所内)		
	雲南情報センター(中国、雲南大学内)		
	北京中医薬大学内情報センター(中国、北京中医薬大学内)		
	ソウル大学内情報センター(韓国、ソウル大学内)		
	延世大学内情報センター(韓国、ソウル大学内)		
	ノエティック・サイエンス研究所内情報センター(米国、同研究所内)		
	国際生物物理研究所内情報センター(ドイツ、同研究所内)		
上記のほか、各国に拡大・展開中。			
支部	東海支部(中部大学内)		
年間予算規模	約600万円～約850万円(1996年度～2002年度実績：但し、各情報センターと支部の活動費を除く)		
市民への情報公開 と成果還元の実績	2002年8月	『こころと体の不思議』国際フォーラム(於：(財)海外職業訓練協会、千葉・幕張)	
学術集会開催実績 および予定	2004年8月	International Conference on Mind Body Science Joint with 第18回生命情報科学シンポジウム(於：韓国・ソウル)主催：韓国精神科学学会、国際生命情報科学会	
	2004年3月	第17回生命情報科学シンポジウム(於：東京電機大学、東京)	
	2003年8月	第16回生命情報科学シンポジウム(於：東京工業大学、東京)	
	2003年3月	第15回生命情報科学シンポジウム(於：東京電機大学、東京)	
	2002年8月	Human PSI Forum『潜在能力の科学』国際フォーラム Joint with 第14回生命情報科学シンポジウム(於：(財)海外職業訓練協会、千葉・幕張)主催：国際生命情報科学会、(財)未来工学研究所/共催：Samueli Institute for Information Biology(米国)、特定非営利活動法人 国際総合研究機構/助成：日本財団/後援：科学技術振興事業団、日本代替・相補・伝統医療連合会議、日本統合医療学会、日本ホリスティック医学協会、日本超心理学学会、人体科学会、日本催眠学会、日本歯科東洋医学会、日本未病システム学会、千葉市、(財)ちば国際コンベンションビューロー	
	2002年3月	第13回生命情報科学シンポジウム(於：東京工業大学、東京)	
	2001年8月	第12回生命情報科学シンポジウム(於：東京電機大学、東京)	
	2001年3月	第11回生命情報科学シンポジウム(於：東京工業大学、東京)	
	2000年8月	第10回生命情報科学シンポジウム(於：東京電機大学、東京)	

学術集会開催実績	2000年3月	第9回生命情報科学シンポジウム（於：東京工業大学、東京）	
	1999年9月	「催眠と生命情報科学」－第8回生命情報科学シンポジウム&第15回日本催眠学会大会 合同大会（於：(株) エーザイ本社、東京）	
	1999年3月	第7回生命情報科学シンポジウム（於：東京工業大学、東京）	
	1998年8月	第6回生命情報科学シンポジウム（於：東京電機大学、東京）	
	1998年3月	第5回生命情報科学シンポジウム（於：東京電機大学、東京）	
	1997年8月	第4回生命情報科学シンポジウム（於：東京電機大学、東京）	
	1997年3月	第3回生命情報科学シンポジウム（於：東京電機大学、東京）	
	1996年8月	第2回生命情報科学シンポジウム（於：東京電機大学、東京）	
	1996年3月	第1回生命情報科学シンポジウム（於：東京電機大学、東京）	
学会誌名称	Journal of International Society of Life Information Science		
ホームページ	http://wwwsoc.nii.ac.jp/islis/journal.htm		
学会誌発行実績	1996年3月号（Vol.14, No.1）より2003年9月号（Vol.21, No.2）まで。通巻16号、総頁数3600頁以上。		
ISSN	1341-9226	判型	A4変型
発行部数	1500部（毎号）	頁数	約250頁（毎号）
言語	英語（およびその和訳）	販売形態	会員無料配布、直販、および取次ルート（(財)日本学会事務センター扱い）
複写権	中間法人 学術著作権協会に委託。 米国内での複写については、Copyright Clearance Centerに委託。		
学会誌を収録する 主要なオンライン データベース (運営組織)	JOIS（日本、科学技術振興機構）		
	Ingenta（米国、Ingenta社）		
	国立情報学研究所電子図書館サービス（日本、国立情報学研究所）		
	IMICOrder（日本、(財)国際医学情報センター）		
	Medical*Online（日本、(株)メテオインターゲート）		
	PsycINFO（米国、アメリカ心理学会）		
医学中央雑誌（日本、医学中央雑誌）			
学会賞授与実績 (2001年度新設)	優秀論文賞3編（8名）、奨励発表賞7件（23名）、功労賞18名 (第1回功労賞受賞者はノーベル物理学賞のBrian Josephson氏)		

関連する諸活動実績

1. 国会議員の潜在能力研究である「人間サイエンスの会」への講師派遣（10数回）
2. 海外の学協会・研究機関との研究交流・講師派遣（米国、カナダ、ヨーロッパ、ロシア、中国、韓国等）
3. 国内学術集会の後援・講師派遣（数10回）
4. 国内外の関連学術誌との雑誌交換（数10誌）
5. 国内外主要図書館・研究機関への学会誌の贈呈（数10機関）
6. 特定非営利活動法人 国際総合研究機構（IRI）の設立支援（2001年）
7. 厚生大臣、科学技術担当大臣、文部科学大臣に、本分野の研究発展施策の要望・面談
(1999年) (2002年) (2004年)

第2章

国際生命情報科学会誌

Journal of International Society of Life Information Science
(*Journal of ISLIS*)

本誌は気功や、潜在能力など、既存の学会誌が扱わない分野の科学的論文を積極的に掲載。その分野の生理計測データが多く入った論文が多いのが特徴で、国際的にユニークで国際的注目度が高い。

国際生命情報科学会 (*ISLIS*) 主催の
年 2 回の「生命情報科学シンポジウム」予稿を主として掲載し、
3 月と 9 月に年 2 号が完全定期刊行されて来た。

上記予稿とは別に、投稿された「原著論文」は
2 名以上の専門家による査読を通過出来た論文 (約半数) のみを掲載。

平均各号 200 ~ 300 頁位、国際版、英文 (和訳付)、
会員以外でも購入可 (本章の最後参照)

編集委員は 2004 年現在 6 名で内 4 名が欧米人 (423 頁参照)

本誌は 1996 年 3 月号 14 巻 1 号より、他誌より分離独立。

第3章

特定非営利活動法人 (NPO 法人)

国際総合研究機構

International Research Institute

(IRI)

本機構は、研究現場や市民生活からの必要に応じて、
学際的・国際的に柔軟かつ迅速な研究等の促進を計ること。

また、市民の、理性と叡智、世界の文化・教育、
心身の健康、生活と社会・環境の向上、
生き甲斐の創成、情報交流に寄与し、
福祉と自然との調和ならびに世界の平和に貢献することを目的とする。

2001年10月4日に学士会館にて設立総会を開催。

2002年1月8日付けにて内閣総理大臣に
特定非営利活動法人 (NPO 法人) として認証された。

東京工業大学、東北大学、長野県長谷村内に事務所が有り、
この他に、情報センター、健康科学研究所、健康法普及会等の組織がある。

皆さんがあたためているプランを、この機構内の組織を増設し、
行うことが出来る。積極のご提案を。

第4章

人間サイエンスの会

国会議員の潜在能力の研究会

本会は、超党派国会議員約20名により
1997年3月に設立された。
以来、議員会館に毎月1回、
講師を招いて講演を聞き、
議論を続けて来た。

2004年2月26日の会合で第56回となった。

国際生命情報科学会（*ISLIS*）の何人かは、本会の講師をつとめ、
また準会員として参加している。

人間サイエンスの会 設立趣意書

1. 現代の限界

人類は叡智をもって進化してきました。世紀末を迎え、地球自体の存立すら危ぶまれる不安を感じざるをえない状況にあります。

即ち、学問・宗教はじめ文明すら限界に達したという閉塞感があります。

2. 発想の転換

時代を著しく変革し、進歩を勝ち取るには、ルネッサンス・コペルニクスの転換ともいわれるような新しい価値観の創造が不可欠であります。

しばしば天才といわれる人物が偶然の出来事に遭遇することによって変革が起こったと従来考えられて参りました。しかし、天才の出現を手をこまねいていても何の所産もありません。

一条の光を見つければ、凡人でもそれを迎える努力と好奇心を持たなければなりません。

3. ニューサイエンス

かつて、科学の限界は宗教によって拓かれ、宗教の限界は科学によってまた拓かれました。「やっぱり地球は回っている」のであります。

このように思いを至したとき、宗教にも似た現代における「不思議」を真剣に勉学研究することは、新しい時代を創造し、閉塞感を打破する一助となるのであります。

4. 人間サイエンスの会

本会は、人間の潜在能力を科学し、もって時代の進運に寄与せんとする叡智のある人の結集でありたいと願う者の会合であります。

どうぞ宜しくお願いいたします。

(志高ければ、気自ずから盛んなり 吉田松陰)

平成九年三月十九日

発起人 衆議院議員 山本 有二
参議院議員 北岡 秀二

(第 2 期 報 告 書 抜 粋)

人間潜在力の一人よがりの主観論

人間サイエンスの会 会長 山本 有二
衆議院議員 (財務副大臣)

はじめに

「人間サイエンスの会」も、お蔭様で 54 回を数え 7 年程続いており、親しまれるようになりました。

このことは元より、各回の各界からのすばらしい講師のご来演、そして、会員をはじめ参加メンバーの質の高さによるものであります。

特に、文部科学省や、その傘下でいつも本会のアレンジを完璧にこなされる山本 幹男 先生、懇親の場を考案いただける 福岡 齒科の皆様。そして、会員、準会員、本会幹事長の 北岡 秀二 先生と、正に強い味方あったればこそであります。

会長冥利に尽きるところであり、心より皆様方に感謝御礼申し上げます。

衆院選後の平成 15 年 12 月より、「人間サイエンスの会」は第三期として、新たな気持ちで出発し、その初回の第 55 回は、設立当初からの熱心な会員の文部科学大臣 河村 建夫 先生、本会幹事長の 参議院文教科学委員長 北岡 秀二 先生、そして 私と、3 人の話でスタートを切ります。

引き続き第三期もよろしくお願ひ申し上げます。

国家政策として取り組むべき課題

本会が 7 年間程取り組んできた、「人間の潜在能力」こそは、21 世紀に開花させるべき大課題であります。国家発展の源は、国民の高い能力とやる気の「気力」です。

人間サイエンスの会

人間には今科学界が理解しているより、もっともっと大きな能力が内在しております。

それらが開花し、国民一人一人の能力が大きく発展すれば、教育、健康増進、病気の予防、文化の発展、生き生きとした社会創造、産業の活性化に大いに貢献することは、まちがいありません。

このための科学的研究を進展させることは国家的急務であります。

山本 幹男 先生が理事長の 国際生命情報科学会 (ISLIS) や 渥美 和彦 先生が理事長の 代替相補伝統医療連合会議 (JACT) 等に結集している多くの研究者達は、現在政府の援助もなく、四苦八苦しながらも、地道な研究を続けて、日本から世界へ向けて国際的情報を発信し続けております。これらを急速に発展させる必要があります。

米国、旧ソ連や中国では、潜在能力の研究に国家予算を割いて来ました。

米ソでは特に情報活動への応用に重点が置かれていました。これには、人間のもつ特殊な情報処理能力・直観力が必要なことは言うまでもありません。また、中国では国家規模で優れた特殊な能力者の発掘と育成が行われました。これは新しい科学・技術の種を独自に確保し、西洋優位の科学技術の現状を、次世代・次々世代には逆転しようという長期展望に立った取り組みです。

我が日本においても、科学技術を激変させるような種の研究にも積極的に投資することが肝要です。

さらに、米国では 1992 年以来、西洋医学以外の東洋医学的なものを含めた「補完代替医療」のためにも研究予算を出し、2003 年には年間 300 億円にも増大しています。

この背景には、国民の立場に立った医療を希望する国民の大きな声と共に、際限のない医療費増大の重圧の解決策を政府がここに見い出そうとしているからです。

日本も、教育や産業に大きな問題をかかえ、また医療費財政状況が悪化の一途をたどっておりながら、本課題への国家としての取り組みが大幅に遅れており、国家政策として強力に促進する必要があります。

本会は、国民の幸せの増大のために、この大きな目的に取り組んで行

きます。

人間潜在力の一人よがりの主観論 — 耳学問の途上にて —

深い思索の後に、わかりやすく解説して下さる講師の先生方のお話を聞きながら、私自身の肉体や精神に尋ねて、もしかしてこうではないかという思いを綴らせていただきます。題して、「一人よがりの主観論」であります。

(1) 孤独の楽しみの全ては、孤独になったとき、「どのような意識状態でいられるか？」で、その人の能力がさらに開発、発展できるかが決まってくると思います。

小林一茶、「やれ打つな 蠅が手をする 足をする」孤独の中で会話する相手もなく、清貧の極みにありつつ、蠅の観察で時を過ごす。

「天上大風」との頼りない、まるで力強さのない筆跡。栄養不足の身体のままに、書いた墨筆。

そこに、肉体や体力は貧弱なれども、精神は病んでいない姿を感じるのです。だから、免疫力は高く、生命としての力は強く当時としては異例の長生きをしているのです。

孤独のとき、「プラス思考」になるか否か、今風にいえばこれが第一の要諦であります。

(2) 次に孤独状態の長時間の思索から帰結される客観視の意識が重要であります。つまり、一人でいて自分を見つめることができるか、であります。

何を客観視するかといえば、「己」であります。自分自身の肉体や精神を客観的に視ることができるかどうか。

私は今、紙に字を書いています。この私を別の私が、天井の方から、私の背中を視ることができるか、という、少し異常性を加えた意識になりうるかであります。

これは、臨死体験のとき必ずでてくるシーンの一つであります。実際には、覚醒していて視ることが出来るはずもありません。「夢うつつ」あるいは「そのような意識が理解しうる」という程度でよいと思います。

そうすることができれば、潜在力を発揮する、意識の一つの状態を作り出せることが出来ていることになります。

(3) さらに、孤独状態の客観視を自分で楽しめれば、次の段階で、意識の塊をどこにおくか。とくに、地球の真中においたり、太陽、あるいは天上、においたり。

そして、一番大事な丹田や足心においたりするという作業が可能になっていると思います。

強く、堅く、熱く、深く、この意識の塊を感じ取り、それを大切に、自分の身体の中に位置付けること。これによって能力というのは飛躍的に高まるように思われます。

そして、自分の身体の中の変化や喜び、苦痛を自分自身が感じ、それを自分の身体に聞くことが出来るようになれば、もっと意識レベルの上位の段階に入ってくるように思われます。

(4) 例えば、高岡先生の「身体意識」、また、西野先生の「足芯呼吸」、成瀬先生のヨーガの実践、等々。地球上で聖者といわれた人々の記録しかり。これら全て、潜在能力を生かす人の全ての共通点は孤独感を大切にすることから出発していると思います。

以上

しかし、これらの結論は少し違うかもしれません。それは、私が耳学問一人よがりであるからです。また、読まれた先達の皆様から御指南いただければ幸甚であります。

(第2期報告書抜粋)

「人間サイエンスの会」に学ぶこと

人間サイエンスの会 幹事長 北岡 秀二
参議院議員 (参議院文教科学委員長)

昨今、私たちは凶悪犯罪や少年犯罪の急増加に驚かされるばかりか、その犯罪や少年犯罪の原因の多くが至極短絡的かつ直情的で忍耐力や規範意識の希薄化や保護者の監護能力の欠如などに起因していることにも驚かされます。

今や世代を問わず、社会全体の歪がこうした犯罪や事件に現れていると言えるのではないのでしょうか。これまで常識とされていた社会規範や道徳心などに限らず、何時しか私たちは生きることに對する活力や潤い、そして人生における夢や希望さえも失いつつあるように思われてなりません。

こうした現代社会を見るにつけ、私は政治に携わる者の一人として、私たちが失った大切なものを「政治」と言う視野に立って常に追求求めています。特に参議院文教科学委員長に就任以来、日本の国造りの基礎となる教育行政を通じ、活力・潤い・夢・希望を抱いた人間造りに早急に取りかからなければならないと考えています。

そんな私にとって本「人間サイエンスの会」は、その失いつつある大切なものを強く持ち続けている諸先生の方々と出会える貴重な場であり、諸先生方の講演を拝聴する度、時に自身も忘れかけていた何かを呼び起こしてくれる時があります。

現代社会において、これまでの価値観が揺らぎ始め、自信喪失感や閉塞感が広がる中、教育は、国民一人一人が自らの生き方、在り方について考え、向上心を育て、個性に応じた自己の能力を最大限に伸ばしてゆく柱にならなければなりません。また、日本の科学技術の進歩は世界の発展と課題解決に大きく寄与している中であって、未知なる分野に果敢に取り組み、常識に囚われない更なる新しい創造が待ち望まれています。

人間サイエンスの会

私は、今後も本会において諸先生方の講演を拝聴させて頂きながら、自己の研鑽もさることながら、教育行政に生かすヒントを与えて頂くと共に、諸先生方のように創造性に富み、実践的能力を備えた多様な人材の育成を図るべく、研究教育の充実など「政治」の立場から支援をしてゆく所存であります。

最後になりましたが、本会も平成9年3月の設立以来、前回の開催で第54回目の開催となりました。平成15年4月16日には、「第50回記念パーティ」もホテルニューオータニにて開催されました。

平成15年12月11日の第55回からは、本会も第3期の活動を開始します。これも一重に会員の皆様方のご協力の賜と本会幹事長として感謝申し上げます。

また会員の皆様におかれましては、今後益々のご活躍を心からお祈りの申し上げます。

第55回 人間サイエンスの会 第3期記念特別講演

日時 平成15年12月11日(木) 午前10時~12時
場所 衆議院第1議員会館 第1会議室

ご挨拶 かわむら たけお
河村 建夫 先生 文部科学大臣
人間サイエンスの会 会員
前 衆議院 文部科学委員長
国際生命情報科学会 (*ISLIS*) 特別顧問

講演 **21世紀の人間サイエンス**

講師 やまもと ゆうじ
山本 有二 先生 衆議院議員、弁護士
人間サイエンスの会 会長
財務副大臣
元 法務総括政務次官、元 自治政務次官
国際生命情報科学会 (*ISLIS*) 特別顧問

講師 きたおか しゅうじ
北岡 秀二 先生 参議院議員
人間サイエンスの会 幹事長
参議院 文教科学委員長
元 法務政務次官、参議院 行政監視委員会 委員(元 理事)
国際生命情報科学会 (*ISLIS*) 特別顧問

第5章

公的資金による研究例

本分野に関する数少ない公的資金による研究の内の2つの例を本章に示す。

1. 科学技術振興費「多様同時計測による生体機能解析法の研究」
1995～9年度（5年間）実施、年平均約1,500万円（人件費含）
 2. 一新パラダイム創成に向けてー「試行的研究プログラム」
2000～2年度（3年間）実施、年平均約1億円（人件費含）
- 上記以外にも、ごく少数の例があったようだ。

米国で年間300億円程の予算が分配されている、
代替医療の分野では、近年日本でも明るい兆しが見えてきた。
文部科学省科学研究費の募集の内科の中に、代替医療の文字が入った。
「21世紀COEプログラム」の拠点に、富山医科薬科大学が
「東洋の知に立脚した個の医療の創生」の課題で選定された。
2003年12月に、内閣府所管の「総合科学技術会議」にて、
「科学技術振興調整費」の「重要課題解決型研究等の推進」中の
「科学技術政策に必要な調査研究」の1つとして
「代替医療の科学的評価手法の開発」が明記され、
文部科学省の2004年度予算配分（約3千万円）として、公募された。

第5部

著者プロフィール

(提出者 あいうえお順)

青木 孝志

工学博士

AOKI TAKASHI



中部大学 大学院工学研究科 教授
〒487-8501 春日井市松本町 1200
電話 0568-51-1111、Fax 0568-51-1540
E-mail aoki@isc.chubu.ac.jp
国際生命情報科学会（ISLIS）副会長
日本代替・相補・伝統医療連合会議（JACT）、電子情報通信学会、電気学会、応用物理学会、等の会員

1939年信州生。信州の田舎の自然に恵まれた環境にとっぷりつかって10代前半までをすごす。信州大学・文理学部・自然科学科・物理学専攻過程にて物理学を学んだ後、中部大学に奉職。シリコン半導体を用いた放射線検出器の研究を京都大学において行った。水晶結晶の断熱弾性定数、可視・紫外の光学吸収、赤外吸収、内部摩擦、非弾性吸収、共振周波数などについての研究により京都大学工学部より博士号の学位を授与された。

1980年代初期はRemote Viewing (RV)の研究に打ちこみ、その成果の一部は計測自動制御学会リモートセンシングシンポジウムや電子通信学会研究会等に数回にわたり報告した。例えば「リモートビューイング技術を用いた画像通信—画像情報の変容と独立性—、電子通信学会技術研究報告MBE83-71,pp31-38 (1984)」などである。これらの研究をとおして、RV機能は殆ど全ての人に潜在的に備わる人体機能であること、RV能力を開発させるには呼吸などを用いた精神・魂の緩和と緊張の制御、自律神経機能のバランス、視覚機能の特殊トレーニング（暗室にて周辺視機能・内観、明室にてコンピュータによる特殊映像や特殊写真等を応用する訓練）が重要であること、などを理解した。しかし、この研究を行った1980年代初期は、まだ当該学会もなく孤立無援であり風当たりが厳しくなり研究停止のやむなきに至った。しかしながら、これは極めて重要な分野であり、やがて多くの大学でこの研究を含めた人体の潜在機能の研究がなされる時代がくるという確信を抱いた。もう、ふた昔も前のことである。現在は学会が組織され、人体の研究が広くなされるようになってきたことを喜ばしく感じている。

最近、気の発生メカニズムの解明、気功の機械化に取り組んでいる。最近、科学技術振興事業団より支援を受けて、開発した波動装置による幾つかの病気モデル（動物）への照射試験を行った結果、慢性関節炎、急性関節炎、悪性腫瘍、疲労抑制に効果があり、とくに悪性腫瘍に大きな効果があることを導きだしている。人工的電磁波動場を生体に照射して、自律神経機能の調整、免疫力の調整、疼痛緩和などの効果と、非侵襲的で薬にあまり頼らぬ（従って薬害、副作用の少ない）治療の可能性を期待して開発を行っている。

趣味は、美術館・博物館めぐり、山野・草花・自然と親しむこと等。関心事は未来工学。

伊藤 正敏 医学博士
ITO H MASATOSHI



1. 東北大学サイクロトロンRiセンター核医学研究部
教授
〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉
電話 022-271-7801、Fax 022-271-3465
E-mail itom@cyric.tohoku.ac.jp
HP <http://www.cyric.tohoku.ac.jp/>

2. 国際総合研究機構 (IRI) 理事
International Society of Life Information Science (ISLIS) 理事、会長、
日本核医学会評議員、日本医学放射線学会、日本老年医学会

1947年6月長野県生。信州大学医学部医学科卒業、東北大学加齢医学研究所(旧抗酸菌病研)に移り、X線CTを用いた脳萎縮の定量法を開発し東北大学医学博士を取得。助手、講師を経て、1987年東北大学サイクロトロンRiセンター助教授、1996年教授承認し現在に至る。1979年英国ハンマスミス病院サイクロトロン研究施設にてポジトロン断層法(PET)を学ぶ。

初期には、癌の治療医を志し、癌の放射線生物学を研究していたが、X線CTの登場をきっかけに脳計測学、脳科学を学ぶ。脳の加齢現象、痴呆、脳神経受容体解析法の開発を専門とするが、脳科学においては、認知学は西洋に譲るとしても、瞑想法は、東洋の資産であるとの信念で瞑想法の脳画像科学を開始し、気功、ヨガ実行時の脳研究を行なっている。心電図、脳波の解析にも興味を持っている。

趣味は、サイクリング、ゴルフ等。音楽、映画も好む。コンピューター・プログラミングは、趣味と実用を兼ねている。

印 藤 裕 雄

INDO

HIROO

伝統医学基礎研究所, 東洋医学室 調神堂 主宰
〒253-0061 茅ヶ崎市南湖 3-17-35
Tel&Fax 0467-88-1181
E-mail: ind.hiro@jcom.home.ne.jp



国際生命情報科学会 (*ISLIS*)、全日本鍼灸学会(学術認定)、
人体科学会、日本代替・相補・伝統医療連合会議(実行委員)、日本統合医療学会。

1958年 埼玉県生まれ。80年 私立理学系の大学を卒業後、財団法人藤永くまえび研究所にて主に魚類、甲殻類の人工孵化・放流技術、水産資源解析の研究に従事する。84年、研究所を退職。1985年 花田学園入学。鍼灸(東洋医学)学生交流会、医系学生の集い実行委員などの活動を通じて、東西の医学の枠を超えた形での学生交流を進める。在学中より鍼灸を柴崎保三氏、漢方を栗島行春氏に師事。1988年より北里研究所付属東洋医学総合研究所、間中病院東洋医学科にて間中善雄博士の下、臨床・研究に従事する。間中の逝去ののち、小田原にて東洋医学室 調神堂を開業(1990年)、現在に至る(伝統医学基礎研究所、東洋医学室 調神堂)。

鍼灸・湯液・按摩だけでなく、密教系の瞑想術の修行や呼吸法、体操法を取り入れた総合的な心身一体の治療法を行う。一方で、古代から伝わる経絡現象の科学的解明や治療器の研究・開発も行っている。生命現象に直接的に関わってきた伝統医療は、知的理解のみでは届かない深みをもってありつづける。現代人の減耗した感覚でそれを体得してゆくのは大変困難ではあるのだが、そこにこそ現代人の病んだ部分を回復させる鍵があるように思っている。最近では、海外の伝統医療、CAM研究者との交流にも力をいれており、Bangalore で開催された Global Holistic Health Summit において脈診法の比較から、インスピレーションを得る事が出来たのは、最近の収穫である。

ISLIS に入会したのも、科学の枠組み・常識に拘らない形で研究する人の集まりである事に魅力を感じたから。奥先生との共同研究もその中から出てきたものなので、日本の中では大変貴重な場になっているのではないかと。これからもより多様な科学的試みを包含するところであって欲しい。

専門分野: 東洋医学(鍼灸、湯液、按摩、治療瞑想法、呼吸法、体操法)、生命情報学。
興味分野: 伝統医療全般(特に西藏、印度医学、ツングース系の巫術)。量子物理学。生物学(発生学、進化学、)。バイオレオロジー。考古学。医史学
趣味: 釣り(Lure & Fly) 多忙で殆ど行けず。うちの犬と遊ぶこと。ハーブ、薬草作り。

上田 至宏

医学博士・薬剤師

UEDA YOSHIHIRO

1. 関西鍼灸大学・医学情報センター長・教授

〒590-0482 大阪府泉南郡熊取町若葉二丁目 11-1

電話: 0724-53-8251、 Fax: 0724-53-0276

E-mail: ueda-y1@mahoroba.ne.jp



2. 大阪大学医学部情報生理学・非常勤講師

日本生理学会 評議員、国際生命情報科学会 (*ISLIS*) 理事

日本代替・相補・伝統医療連合会議 (JACT) 評議員、日本伝統医療学会、日本生物物理学会、全日本鍼灸学会、日本神経科学会、日本体力医学会、日本音楽療法学会、日本疼痛学会、日本自律神経学会、末病学会、密教図像学会、脳の世紀 各会員

1944年9月生。氣がよく集まる場と言われる大和、三輪山の麓で生まれ、幼少時は大神神社や、卑弥呼の墓かと話題にのぼる箸墓をよく訪れ、植物採集と古代の空想にふける。学生時代はキリスト教と癒しに興味をいだき、京都薬科大学では植物薬研とマンドリンクラブに属する。'68年大阪大学医学部生理学教室にて研修生として、ヘモグロビンの分子生理学の研究を始める。'72年から助手。翌年“ヘモグロビン酸素飽和度とプロトン解離度の非直線性”で阪大医学部より学位を授与される。'74年からの米国出張(コロンビア大学医学部生化学教室とアルバート・アインシュタイン大学医学部血液学教室)では特に鎌形赤血球症の病態生理機作を分子レベルで研究、帰国後は、呼吸生理の研究を行う。(ここまでは要素還元主義による研究手段が主であったが、帰国を境に、非平衡系の熱力学に興味に移り、カオス、複雑系の科学的方法論とユングに注目しだす。) 20年前、住居を宇治・黄檗に移り住み、座禅、太極拳、養生気功を始める。自宅は日本の代表的な3つの禅宗(曹洞宗、臨済宗、黄檗宗)の禅堂に近く、それぞれの座禅に方法論の違いを知る。参禅中、不思議な体験をするが、現状では生理的には説明できず、密かにライフワークと決める。中でも曹洞宗、西嶋老師の指導で、正法眼蔵に出会う。また19年前、高野山と東寺で両界曼荼羅に出会う。それ以来、毎月深夜高野山に参拝、空海の両界曼荼羅の世界、密教医学の世界に遊ぶ。そこからベータ医学とタンカ、チベット医学へと発展する。また、植物学の芳香と禅堂での線香から香道にも出会う。'84年からは関西鍼灸短大で、生理学、衛生学、情報科学等の教鞭を取る。同年、腰痛の際、鍼灸経絡治療を初めて体験する。鍼灸学の現状を知り、鍼灸医学、密教医学、チベット医学、ベータ医学に共通する生に対する考え方に驚嘆、現代医療における必要性を痛感する。

東洋医学では氣、経絡・経穴の問題は避けておれないテーマであるため、脳波、脈波、呼吸波、心電図等の波形をゆらぎの観点から検討している。また現在は、“経絡・経穴の存在は記憶にありや?”というテーマでf-MRIを用いた画像解析と脳波の面から、研究を進めている。一方、医学系学会では背髄及び、末梢レベルでの痛みの生理学; 痛覚伝達と鎮痛作用機構について、電気生理学及び免疫組織化学的手法を駆使しながら、西洋医学的な実験方法による研究を進め、活動している。

真理とするもの : 両界曼荼羅と正法眼蔵(空海と道元の共有世界)

目標とするもの : 曼荼羅の生理学(東洋生理学)の確立

キーワード : 色即是空とカオス、無為自然

現在の趣味 : 能面打ち、ハーブ栽培、気功、パソコン、雑学で好奇心旺盛。

内 山 明 彦

工学博士

UCHIYAMA AKIHIKO



1. 早稲田大学 理工学部 教授
〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1
電話 03-5286-3382、Fax 03-3200-7094
E-mail profau@waseda.jp

2. 早稲田大学 生命・生体・福祉研究所 所長
(財)パブリックヘルス リサーチセンター 評議員
同 上 付 属 ストレス科学研究所 運営委員
国際バイオテレメトリー学会理事、など

ISLIS、日本エム・イー学会、電気学会、電子・情報通信学会他 会員

<略歴、研究歴、学協会歴、受賞歴、著書、など>

1934年 11月生。1958年 早稲田大学理工学部電気通信学科卒業。

1958年 東京大学工学部応用物理学科助手

1960年 早稲田大学理工学部助手

1963年 同上専任講師

1967年 同上助教授

1973年 同上教授 現在に至る。

なお、1976-1977年 UCLA 医学部客員教授

1959-1963年から「消化管内計測用無電池式カプセル」の開発、1960-1963年「植え込み型心臓ペースメーカーの開発」。1970-1973年に「消化管内サンプル採取用カプセルの開発」を行う。1976-1980年「心拍出量の無侵襲計測法の開発」。1980-1983年「聴性脳幹反応による麻酔深度計測」、1983-1990年「人の色覚特性の計測と解析」、1990-1997年「消化管pH計測カプセルのIC化」。1997-1999年「医用画像の3次元表示法の開発」。1993-1999年「超音波による体内計測機器へのエネルギー伝送」、1996-1999年「色表示の制御方式の開発」。1999-1999年「香りおよび音楽の癒し効果の定量化」などの研究を行う。

著書 回路理論演習(オーム社)、パルス回路(コロナ社)、医用電子工学(昭晃堂)、他共著7

賞 1965年 電気通信学会 稲田賞、2002年 早稲田大学大隈記念学術褒賞

奥 健 夫 博士（工学）
OKU TAKEO

大阪大学 産業科学研究所
産業科学ナノテクノロジーセンター 助教授
〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 8-1
電話 06-6879-8521 Fax 06-6879-8522
<http://www.sanken.osaka-u.ac.jp/~oku/frame.html>



International Society of Life Information Science (ISLIS) 理事

電気学会・次世代コヒーレント量子ビーム技術調査専門委員会 委員

日本顕微鏡学会関西支部 評議員、など

日本金属学会、日本セラミックス協会、フラレーン・ナノチューブ研究会、日本物理学会、人体科学会、日本代替・相補・伝統医療連合会議(JACT)、日本アーユルヴェーダ学会、日本統合医療学会(JIM)、日本音楽療法学会、日本ホリスティック医学協会、国際コミュニオン学会、各会員

1965年茨城県生。日立第一高校卒業後、東北大学工学部原子核工学科に入学し、1992年に東北大学大学院修了（工学博士）。1992年に京都大学材料工学教室・助手、1996年に京大退職後、スウェーデン・ルンド大学化学センター・博士研究員、1997年に大阪大学産業科学研究所・助教授、2002年大阪大学産業科学ナノテクノロジーセンター・助教授となり現在に至る。

超高分解能電子顕微鏡により様々な最先端物質（高温超伝導体、フラレーン・ナノチューブ、化合物半導体、セラミックス等）の個々の原子を直視し、3次元原子配列と高次物性発現機構についての研究を電子結晶学・第一原理計算等を駆使して推進してきた。

原子配列直接観察・解明は先端材料だけでなく、究極の原子配列調和物質である生命体の、生命・意識発現機構を解明する上でも非常に重要な分野となりつつある。これらの研究を進める上で、「意識及び生命エネルギーの科学的解明と応用」が科学における最重要課題であり、さらに平和・幸福な社会の形成において必要不可欠な人類の課題であると確信する。

多彩な原子の世界を見ているうちに、物質・原子だけでは説明がつかない世界があるように感じられ、特に実感として直接感じられてきたのが因果律である。身体・心・魂の調和と癒しが現代社会に必要であることを感じ、西洋医学・物質科学のみならず東洋医学・哲学を含めた幅広い視野から見た研究・勉強を、多くの皆様の助けを頂戴しながら2年前から少しずつ始めさせていただいており、*ISLIS*とのめぐり合わせにも大変感謝している。

趣味は、エレクトーン、スキー、テニス。

Institute for Healing & Self-Realization ⇒ <http://www.h7.dion.ne.jp/~ihsr>

河野 貴美子 博士(工学)
KAWANO KIMIKO



1. 日本医科大学 情報科学センター
〒113-8602 東京都文京区千駄木 1-1-5
電話 03-3822-2131、Fax 03-3823-2675
E-mail: kim@nms.ac.jp
2. 独立行政法人 放射線医学総合研究所 客員研究員
3. 東京都済生会看護専門学校 講師

NPO 法人国際総合研究機構 (IRI) 理事
NPO 法人国際文化交流協会 理事
国際生命情報科学会 (ISLIS) 副会長 (元会長)、
人体科学会 常任理事、日本催眠学会 理事、
日本代替・相補・伝統医療連合会議(JACT)、日本統合医療学会 (JIM) 評議員、
日本生理学会 評議員、日本数学協会 幹事、全日本珠算教育連名 顧問 など

著書、共著書に 「ビットの本」ソニー出版
「決定版気の科学」総合法令
「脳に差がつくそろばんのすすめ」ハート出版
「心とは？」人体科学会
「科学技術は地球を救えるか」富士通ブックス
「代替医療のいま」医歯薬出版株式会社
共訳書に 「意識の進化論」青土社

岡山の地に生まれたが、すぐ静岡に移り、そして4歳より東京暮らしである。静岡の山あいのような里山や田畑に囲まれての生活をずっと夢見ながら、いまだに山手線内側の人口密集地、豊島区から離れられずにいる。

大学では現代物理学を専攻したが、1967年、日本医科大学第一生理学教室に入り、「モノ」の世界から「いのち」の世界へ転換することになった。そこで、微小電極による神経細胞の膜電位測定実験や、赤血球の膜電位測定を手がけ、イオンや温度による影響を調べる一連の研究で、もっぱらカエルやイモリと付き合っていた。

1986年、日本医科大学基礎医学情報処理室(現、情報科学センター)発足とともに移籍。そして、コンピュータ教育やネットワークの仕事と共に、脳波により、ヒトの思考過程を探る実験を開始した。催眠、気功、瞑想、音楽、香り、珠算、速読、将棋、イメージトレーニング、等々、あらゆる状況下での脳波を通じて、脳の機能解明に迫りたいと考えている。

趣味として、野山を散策し、野草を眺めながら絵を画くこと、とでも言いたいが、もっぱら自転車や原付で都内ばかりを動き回っているのが現状である。

木戸 眞美 理学博士

KIDO MAMI

東北学院大学 教養学部 情報科学専攻 教授
〒981-3193 宮城県仙台市泉区天神沢 2-1-1
電話 022-375-1199 (1188), Fax 022-37
E-mail mquido@hotmail.com



国際生命情報科学会 (ISLIS) 理事
人体科学会 常任理事・編集委員
日本ME学会会員、日本音響学会会員

1952年2月生。幼少の時に家族とともに渡米し、アメリカのワシントン州エジソン小学校を卒業。中学時代はピアノや油絵と読書に熱中。高校3年生の夏に“佐藤総理オーストラリア科学奨学生”に選ばれてシドニー大学でイギリス、アメリカ、オーストラリアの学生達とその年のテーマだった原子物理学の講義を聴き、科学者になることを予感。

東京大学では物理化学を専攻し、電子線回折の研究で卒論。修士・博士課程ではX線結晶構造解析で光学錯体やヘモグロビンのモデル化合物の研究を行った。スピノクロスオーバー錯体の結晶を真空ライン中で合成し、その結晶を室温と90Kで構造解析してスピン相転移の機構を明らかにして理学博士を取得。その際、低温装置なども新しく自作して、研究の面白さを知る。その後も日本学術振興会奨励研究員として東大物性研究所で、1 kG磁場下のテルビウム鉄ガーネットの精密構造解析から初めて4f電子の異方性を実験的に明らかにしたり、遷移金属カルコゲナイトのインターカレーション化合物の超伝導研究を行った。仙台に移ってからは、東北大学の科学計測研究所で半磁性半導体のピコ秒分光の研究を行なった。

1985年の国際磁気学会でサンフランシスコに行った頃から人間の精神作用や未知の現象に興味を持ち始める。東北学院大学が教養学部を新設する際に、情報科学の一員となる。現在は、生命情報としての人体計測を、主として単一矩形パルス法や近赤外線分光法などを用いて行っている。研究上の興味は精神作用や心身相関、遠隔ヒーリング作用および音声解析など。

趣味は読書、ピアノ、音楽や絵画鑑賞、旅行

小久保 秀之
KOKUBO HIDEYUKI



1. 国際総合研究機構（IRI）主任研究員
〒263-8555 千葉市稲毛区穴川 4-9-1
電話 043-206-3066、Fax 043-206-3069
E-mail : kokubo@nirs.go.jp
nbb03272@nifty.ne.jp
2. 明治大学 情報コミュニケーション学部 兼任講師
3. 跡見学園女子大学兼任講師

International Society of Life Information Science（*ISLIS*）常務理事・事務局長、Journal of International Society of Life Information Science 編集部長、日本超心理学学会 運営委員、編集委員長

1958年10月、愛知県生まれ。父は毎日新聞の記者で、しばしば転勤があったが、一番長く住んだのが名古屋市なので名古屋出身で通すことが多い。

幼少時代は、図鑑や本・マンガを与えておけば、いるかないかわからなくなるほど大人しかった。中学・高校時代は、絵やギター、SFが好きで、フォークソングを作ったり、小説を書いたりした。

名古屋大学理学部に入った頃は、ユリ・ゲラーのスプーン曲げブームの余韻がまだ残っていた。超常現象研究会というUFOと超心理学の学生サークルがあったので入り、このとき初めてJ.B.ラインの本を読む機会に恵まれた。カード実験や遠隔視の実験を楽しんでいたが、残念なことに、大学には超心理学を研究テーマにする教室がなかったので、比較的近いと思われた生物物理を学んだ。

卒業後15年間、三省堂で理数系の編集の仕事をしていて、1996年に放医研の山本研究室で面白そうな研究が始まると、私も混ぜてくれと押し掛け、今では何10年もいるような顔をしている。研究と学会の仕事をこなす一方、諸外国の研究者との交流にも努力し、最近7年間で中国、イギリス、オランダ、ドイツ、アメリカ、カナダ、ロシアの7カ国を訪問し、さらに2004年春には、ポルトガルとブラジルにも出かける予定である。電子メールでのやりとりは読み書き能力だけの何とかなる、プレゼンテーションツールさえ使えば何とか発表はこなせる、という典型例？かもしれない。

主な著作物

小久保秀之：超心理学—未知能力の探究、in 磯崎・小野寺・宮本・森編『マインド・スペース—加速する心理学』、pp.111-124、京都：ナカニシヤ出版、1999
(2004年4月1日現在)

菅野 久信 医学博士
SUGANO HISANOBU



1. 産業医科大学 名誉教授
2. (財)エム オー エー健康科学センター
生命科学研究所 顧問
〒413-0033 静岡県熱海市熱海 1767-15
Tel : 0557-86-0663
Fax : 0557-86-0665
E-mail : sugano-h@rr.ij4u.or.jp

International Society of Life Information Science (**ISLIS**) 評議員
日本脳波筋電図学会、日本ME学会、日本味と匂いの学会、日本生理心理学会、
ISSSEEM(International Society for Study of Subtle Energy and Energy
Medicine)、International Society of Stress

1926年福岡県生まれ。東京大学工学部卒 九州大学医学部薬理学講師、九州大学
医学部心療内科助教授、九州大学医療技術短期大学部教授、産業医科大学医学部教
授を経て現在に至る。

九州大学勤務中医学部の研究機器の開発に追われ、その後脳の電気生理学に興味
を持ち脳波の研究に没頭。ロックフェラー財団により3年間シカゴ大学医学部に電
気生理の研究、その後、Microvibrationの研究によりオーストリア政府の招待を受
けウィン大学心理学教室に1年間滞在。現在、脳と心の問題について迷路に入り込
んでいる。また、アロマセラピーにも関心がある。

最近現代科学で解明出来ない目に見えない現象(超能力など)に関する研究が増
えてきているが、その中には全く科学的でないものも多く、そのために真面目な研
究に対しても強烈的な批判をする人がいる。それらを無視するか批判者と討論をもつ
かが今後の課題であると思う。

外国では何でも発表させてその場で討論することが多いが、日本ではこのような研
究は異端視されていてこのような現象に興味を持つ事自体、頭がおかしいと思われ
ている。そのためにも今後このような実験には環境条件と被験者の暗示性について考
慮し批判に対抗出来るような事実を証明出来る力を付ける必要がある。

私の趣味は森林浴、登山、暇さえあれば山に出かけている。

尚、当研究所は未知のエネルギーの解明のために開設されたものでおそらく世界
で唯一つの整備された研究機関であると思う。皆様方の訪問と討論の機会があれば
と思っています。

鈴木 エドワード 建築家

SUZUKI EDWARD



鈴木エドワード建築設計事務所株式会社

所在地：〒158-0095

東京都世田谷区瀬田 1-15-23 メゾンマリアン3F

電話：03-3707-5272 FAX：03-3707-5274

E-mail esa@edward.net URL <http://edward.net>

創立：1977年 業務内容：建築設計・アーバンデザイン・インテリアデザイン

- 出生：1947年9月18日 埼玉県狭山市
- 学歴：1966-71 ノートルダム大学 建築学士
1973-75 ハーバード大学院 アーバンデザイン建築学修士
- 経歴：1974 バックミンスター・フラウ&サダオ
イサム・ノグチ ファウンテン&ブラザ
1975-76 丹下健三都市建築設計研究所
1995 客員教授 ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン/米国
客員クリティック GSD ハーバード大学
- 主な受賞：1983 [菫賞] 金賞・通産大臣賞—山下池田山ハウジング
1988 建築士会住宅賞—碑文谷ガーデンズ
1995 日本建築士会連合会賞・優秀賞—東京倶楽部
1998 第6回公共建築賞—JR 東日本 赤湯駅
2002 埼玉県 20世紀景観賞—JR 東日本 さいたま新都心駅
- 主な作品：1985 警視庁渋谷警察署宇田川派出所（東京都渋谷区）
1992 ムパタ・ロッジ（アフリカ ケニア）
1997 西町インターナショナルスクール（東京都港区）
2000 世田谷区立野沢高齢者在宅サービスセンター（東京都世田谷区）
2001 山野ビューティメイト迎賓館及びレジデンス（東京都渋谷区）
2002 東関東自動車道酒々井PA（千葉県印旛郡酒々井町）
2003 GAMO 青山スタジオ（東京都港区）
JR 東日本 東京駅 銀の鈴待合い広場（東京都千代田区）
- 出版：1989 鈴木エドワード EDWARD SUZUKI: Architect（六耀社）
1996 Edward Suzuki: Buildings and Projects（アクセルメンゲン社 ドイツ）
1997 雲のかなたに（現代企画室）
1998 INTERFACE（建築ジャーナル）
2003 FORMA: Atommetrics（形の科学会）

張

彤

学士（医学）、修士（臨床心理学）

ZHANG TONG



1. 国際総合研究機構（IRI）研究員
 2. 上智大学比較文化学部 非常勤講師
- 放射線医学総合研究所 山本生体放射研究室内
〒263-0035 千葉市稲毛区穴川 4-9-1
電話（直）043-206-3066、
Fax（直）043-206-3060
E-mail chang@nirs.go.jp

International Society of Life Information Science（ISLIS）会員

中国の武漢生まれ、北京育ちで、中学校、高校時代は数学、物理など理科系が好きだったが、父がガンでなくなったことが、医学をめざしたきっかけとなった。

大学では臨床医学を専攻したが、心の悩みなど自らの経験から、心のメカニズムに興味を持ち始め、心理学の世界に突入し、心身相関について研究を始めた。

お茶の水女子大学大学院時代から、瞑想、気功など心身鍛錬法における心理的、生理的变化、またはその健康増進効果を研究テーマに、いろいろ模索してきた。

1999年から2003年まで、放射線医学総合研究所、および（財）未来工学研究所にて、「多様計測による特殊生体機能に関する研究」（課題代表：山本幹男）に参加し、瞑想・気功における生理的变化について、脳波/ fMRI / 光トポグラフィによる測定および分析を中心に、研究を行った。現在、特に注意や呼吸の制御という作法の特徴から、脳の関連部位および自律神経活動への影響などについて、研究を進めている。

趣味は、読書、水泳、社交ダンス。

陳 偉 中
CHEN WEIZHONG

博士（理学）（2004.3.25 見込）



1. 独立行政法人（文部科学省所管、元 科学技術庁 直轄）
放射線医学総合研究所 山本生体放射研究室
〒263-8555 千葉県稲毛区穴川 4-9-1
電話 043-206-3066、Fax 043-206-3069
E-mail chenwz@nirs.go.jp
2. 国際総合研究機構（IRI） 研究員

International Society of Life Information Science
（*ISLIS*）、人体科学会、 の会員

1966年2月中国 上海市に生まれ、育ち。1988年7月、上海交通大学 動力機械学部 原子力学科を卒業。1992年6月、来日。1996年3月、大阪大学 大学院で原子力工学を専攻 修士修了。

放射線医学総合研究所の連携大学院生として、千葉大学 大学院自然科学研究科 多様性科学専攻の博士後期課程の修了により、2004年3月、理学の博士号を授与される予定（学位審査終了）。

大学および修士課程では、原子力工学における熱輸送に関する指標測定、そして、高速増殖炉「もんじゅ」の熱輸送システムの小型化に関する研究をした。

その後、原子力などの現代科学技術だけで、世界のエネルギー事情をひとつ、物質と精神を調和した人々の平和を真にもたらすことが改善できないと感じ、物質と精神の相互関与を含む分野・世界に目を向けた。

博士後期課程では、「気功意識状態時の人体の生理変化に関する研究」を学位論文にまとめ、日本・中国において、気功の科学的研究のテーマで博士号を獲得した数少ない研究者である。

2000年より、放射線医学総合研究所の山本生体放射研究室・未来工学研究所・国際総合研究機構にて、現在に至って、特殊な意識状態（気功、瞑想など）が人体に及ぼす影響を研究し続けてきた。

趣味は、小学校では、バレーボール、水泳、中学校では水泳、バスケットボール、サッカー、大学では、サッカー、来日後、スキーなど。そして、草と木、山と水、海と雲などの自然と無言の交流が好きである。

沈 再文

医学博士

Shen Zaiwen



1. 中京女子大学 健康科学部 教授
(健康リフレッシュ学研究室 代表)

〒474-8651 愛知県大府市横根町名高山 55

電話：0562-46-1291 FAX：0562-48-1977

E-mail：shen@chujo-u.ac.jp

2. 上海中医薬大学 客員教授
上海市気功科学研究会 名誉理事
香港中国気功科学研究会 名誉顧問

International Society of Life Information Science (ISLIS) 評議員、学術会員
人体科学会 学術会員、健康創造研究会 学術会員

1946年11月、中国上海市に生まれる。6歳から気功及び太極拳などの中国武術、13歳から中国医学を学ぶ。気功の医学的研究は1978年上海中医薬大学大学院生の頃から、著明な気功研究者で生理学者林雅谷先生の指導のもとで始めた。中国で初めて気功の研究論文で医学修士の学位を授与される。その後、研究員あるいは医師として上海中医薬大学中医研究所（現上海市気功研究所）で勤めた。

1984年1月に初来日。大阪大学医学部と愛知医科大学で温熱生理学、神経生理学および気功を研究し、大阪大学医学部から医学博士の学位を取得。気功についての研究成果は1986年「宇宙航空環境医学」雑誌23号に英文で発表した。気功に関する科学的な実験を行い、その成果を論文として報告したのは、日本で一番早かったかと思われる。この頃から、沈は日本の各地で気功や鍼灸、中国医学などの講演を行い、日本での創成期の気功普及に貢献した。

1987年からカナダのGuelph大学で客員教授として一年間生理学の研究を行った後、カナダ中日健康研究院を開設、二つの診療所で診療に従事する。このかたわら、カナダとアメリカの各地で数多くの講座、講演会を開き、気功と中国医学の普及に努めた。

1993年、中京女子大学客員教授として招聘され来日。活動の中心を日本に移す。1994年から、同大学大学院教授および健康科学部の教授に就任。現在、中京女子大学で、健康科学、健康リフレッシュ学をはじめ、日本の大学で初めて正課の授業として健康スポーツ・気功・太極拳も教えている。その傍、日本、カナダ、アメリカの各地で気功と中国医学の紹介・普及に活躍している。

「強壮気功健康法」、「外気治療法の実際」（創元社）、「正宗八卦掌」（BABジャパン）、「Dr. Shen's Short Form Tai Chi」（カナダ）など多数の本とビデオテープを出版している。

趣味は、旅と音楽（主にヒーリング）、絵を鑑賞すること。

中村 泰治 理学博士

NAKAMURA YASU HARU

昭和大学 名誉教授

日本生化学会、日本神経化学会、日本薬理学会
評議員、国際生命情報科学会（*ISLIS*）評議員、
日本薬学会、日本代替相補伝統医療連合会議
日本統合医療学会 会員



1925年12月2日東京生れ。東京府立六中、旧制東京高校卒。'48年東京工業大学理学部化学科卒。'49年東工大理学部に生物化学教室が新設され、その助手となる。好熱性細菌、つぎにタンパク質の構造と機能の研究を行う。'62-'64年イリノイ大学食品化学科研究員。動脈硬化とリポタンパク質の研究に従事。'65年昭和大学教養部(化学)教授、'67年同大学薬学部(生物化学)教授となる。脳のモノアミン酸化酵素、機能タンパク質（カルシウム結合タンパク質、タンパク質リン酸化酵素など）の活性部位の構造決定、ミラクリンたんぱくの構造決定、脳特異タンパク質の精製と機能の研究、ガン遺伝子発現調節因子などの研究に従事。'91年定年退職、昭和大学名誉教授となる。

'43年から'49年の間、中村天風の統一哲医学会でヨガの修行をする。心が体に与える影響の大きさを驚きをもって体得するとともに、テレパシー、クレアボヤンスなど人間の持つ未知の能力に強い興味を抱く。

'66年から今日にいたるまで、白光真宏会（世界平和を祈る会）にて五井昌久師の教えに従い、世界人類の平和と自己の神性発現を、同時成就する平和の祈りの修行をつづける。そして、人間のいのちは宇宙根源の絶対なるもの、宇宙神と繋がっているものであり、そこからの光、エネルギーによって生かされているのである、ということを知る。この宇宙からの光、波動が人間にどのように働くのか、分子生物学的に（分子のレベル、原子のレベル、量子のレベルで）知りたいと強く希望している。

趣味は、絵を描くこと（20才代は油絵、40才代は水墨画、50才代から日本画）。スポーツはスキー（昔は1級、今は？）とゴルフ。

韓 在 都 博士（工学）
HAN JAE DO



1. 社団法人 人間生活工学研究センター 研究員
〒541-0047 大阪市中央区淡路町 3-3-7
電話 06-6221-1658、Fax 06-6221-1705
E-mail han@hql.jp
HP <http://www.hql.jp>
2. パブリックヘルスリサーチセンター
ストレス科学研究所 客員研究員
3. 早稲田大学 生命・生体・福祉研究所 客員研究員

日本エム・イー学会、日本体力医学会、日本運動生理学会、ライフサポート学会、
日本味と匂い学会、日本健康心理学会 会員

<略歴、研究歴、学協会歴、受賞歴、著書、など>

- 1989年 ソウル市成均館大学 師範大学 体育教育学科卒業（体育学士）
1993年 早稲田大学理工学研究科 電気工学（通信）専攻 修士課程修了 修士
（工学）
1999年 早稲田大学理工学研究科 電気工学（通信）専攻 博士課程単位修得後
退学
2003年 早稲田大学理工学研究科 生命理工学専攻 博士（工学）
1999年（財）パブリックヘルスリサーチセンター ストレス科学研究所 研究員
2003年（社）人間生活工学研究センター 研究開発部 研究員

<研究分野、趣味、など>

経済・産業のグローバル化やITを始めとする科学技術の急速な進展によるワークスタイル、ライフスタイルの変化に伴い、現代人は様々なストレス因子にさらされながらの生活・労働を余儀なくされている。人間の心身のエネルギー消費量やストレス許容量には限界があるため、過剰なエネルギー消費やストレス状態が続くことによる慢性疲労、心の病が社会的な問題になっている。いかに生活の質（QOL）を高めるかが重要な課題になっている。医師を中心とする医療関係者が厳命に取り込んでいるにもかかわらず、人手の不足や高齢者の急増に十分なサポートが出来ないのが現実である。特に万病の原因と言われるストレスは避けて通ることが出来ない。これからの医療においてストレスとそのマネジメントは重要視されるであろう。ストレス反応の生体計測と解析によって、ストレス反応の科学的検討と成果がストレスマネジメントに寄与できれば幸いである。

樋 口 雄 三 医学博士
HIGUCHI YUZO

東京工業大学大学院理工学研究科
工学基礎科学講座 理工学協調分野 教授
〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1
電話・Fax 03-5734-2294



モスクワ医科歯科大学 名誉博士
世界医学気功学会 理事
日本生理学会評議員、日本体力医学会評議員、
International Society of Life Information Science (ISLIS) 副会長 など

著者は、18歳の時にヨーガに接して以来、禅、超越冥想、気功、スピリチュアルヒーリングなどを実践し、杏林大学医学部助手の頃からそれらの医学的研究を行ってきた。幸いにも初期の頃からいろいろなものに巡り会い、それらの良いところを融合し、その精髓を毎日、修練している。このような精神世界の研究は、研究者自身が体験してかなりのレベルに達していることが重要で誤りを少なくする。そして、この精神世界の解明こそ21世紀のメインテーマであり、科学技術の最先端を行く者こそ、このような背景がなければならぬと1993年東工大に移る。それ以来、大学院の講義でありながら受講者が300名を越え、立ち見であられ教室がなくなり、ついに講堂で講義している。

趣味は、スポーツで特にテニスは全日本ベテラン選手権で2回準優勝している。今度は、気を使って優勝しようと思っている。

町 好 雄 工学博士

MACHI YOSHIO



1. 学校法人 東京電機大学

大学院工学研究科電子工学専攻科、

同工学部 電子工学科 教授

〒101-8457

東京都千代田区神田錦町2-2

電話 03-5280-3360, Fax 03-5280-3567

E-mail machi@d.dendai.ac.jp

2. 国際生命情報科学会 (*ISLIS*) 副会長 (初代会長、元理事長)

人体科学会 副会長

1940年7月生。大学、大学院は東京電機大学で、工学博士を東京電機大学から受ける。修士時代はミリ波を半導体のホットエレクトロンによる効果を使い、50GHz、75GHzの発生を行い、博士過程ではレーザー領域で非線形効果により高調波発生の研究を行い、さらに液晶ディスプレイの研究に興味を持ち、モノクロ、カラーの液晶を合成、ディスプレイ材料を開発した。その後、米国オハイオ州立大学に研究員として渡米し、セレン結晶によるレーザーの高調波発生、セレン単結晶の半導体物性、バックワードオシレータ、イオン打ち込みの研究を行った。1年半後に東京電機大学にもどり、青色発光の半導体の研究に着手し、半導体材料の製作、イオン打ち込みなどの研究を開始した。その後、イオン打ち込みの技術を発展させ、アモルファス太陽電池への応用、ダイヤモンド薄膜の成長などを行ってきた。しかし、材料科学には研究費と体力が必要でいつまでもこの研究を続けることは困難であると感じ、健康問題に興味をもつようになった。しかし全く分野がことなり、何を始めようかと考えたが当時ほとんど国内では知られていなかった中国の健康法である気功に興味を持ち、研究を始めた。それ以来20年近くになるが、現在は人間の気は種々の所に利用されていることがわかり、気功と超能力の研究のみではなく最近では人間とコンピュータとのインターアクションの研究に発展している。さらに香の研究も行っている。

百瀬 桂子 博士（工学）
MOMOSE KEIKO

1. 神奈川工科大学 情報ネットワーク工学科
〒243-0292 厚木市下荻野 1030
電話 046-291-3188, Fax 046-291-3272
E-mail momose@nw.kanagawa-it.ac.jp

電子情報通信学会、日本エム・イー学会、IEEE EMBS、
日本神経眼科学会 会員



<略歴、研究歴、学協会歴、受賞歴、著書、など>

1990年 早稲田大学理工学部電子情報通信学科 卒業
1992年 早稲田大学理工学研究科 電気工学専攻 修士課程修了 修士（工学）
1992年 早稲田大学人間科学部 助手
1995年 早稲田大学理工学研究科 電気工学専攻 博士課程単位修得後 退学
1995年 神奈川工科大学電気電子工学科 助手
1998年 早稲田大学理工学研究科 電気工学専攻 博士（工学）
2000年 神奈川工科大学情報ネットワーク工学科 専任講師
2003年 神奈川工科大学情報ネットワーク工学科 助教授
現在に至る

<研究分野、趣味、など>

生体信号処理・感覚機能計測の方法論と、それらを生体医工学・ヒューマンインタフェース分野へ応用展開することに興味をもっている。

山本 幹男 博士(工学)、博士(医学)
YAMAMOTO MIKIO



1. 独立行政法人(文部科学省所管、元 科学技術庁 直轄)
放射線医学総合研究所 主任研究員
〒263-8555 千葉市稲毛区穴川 4-9-1
電話 043-206-3066、Fax 043-206-3069
E-mail yamamo@nirs.go.jp
HP <http://www.soc.nii.ac.jp/islis/belabo/proyama.htm>
2. 千葉大学大学院 後期博士課程 客員教官
3. 国際総合研究機構 (IRI) 副理事長

International Society of Life Information Science (ISLIS) 理事長(前会長)、
Journal of International Society of Life Information Science 編集委員長、
日本代替・相補・伝統医療連合会議 (JACT) 理事、人体科学会 理事、
日本バイオイメージング学会 評議員、電子情報通信学会 医用画像研究専門委員、等

1944年7月生。大学では量子物理学、大学院では原子物理学を専攻。電気通信大学および東北大学より工学と医学の博士号授与。東京工業大学原子炉工学研究所にて研究。

'71年に現所属の放医研に入所。放射線の可視化を研究。'79年に日本初の最先端の核医学診断装置、ポジトロンCT(PET)の独創的方式による開発に成功、科学技術庁長官・注目発明選定証を受ける。'80年から2年間米国のワシントン大学にて研究し、世界初のtime-of-flight情報を用いたPET(TOF-PET)の開発に成功。帰国後、放射線による染色体異常やX線CT像からの肺がんの自動認識法も研究。これらの生体情報イメージング法の研究により科学技術庁長官・業績表彰を受ける。また、日本医用画像工学会より長年の常任幹事・編集委員長として功労賞を受ける。

'93年より、かねて不思議な現象であると思っていた気功や「潜在能力の科学」の研究に乗り出す。'95年より5年間科学技術庁より「多様同時計測による生体機能解析法の研究」の予算を得、本分野のプロジェクトを実施。'95年に国際専門学会 *ISLIS* を創立、理事長として本部事務局・国際学会誌編集部を置き、本研究の国際的情報発信拠点を築く。

2000年度より3年間、科学技術振興事業団の予算を得「潜在能力の物理生理学による実証的研究」を代表者として実施。'01年2月には、同事業団主催の異分野研究者交流フォーラム—新パラダイム創成に向けて—「心と精神の関与する科学技術」のコ・コーディネーターを勤めた。'02年8月には、*ISLIS* 等主催の「潜在能力の科学」国際フォーラムをコーディネーターとして450名を結集し成功させた。'04年8月には、この続きをソウルにて開催予定。'02年11月には、元米国NIH局長らがハワイで主催した「スピリチュアル・ヒーリング」の学会にアジアの組織者として山本が推薦した7名が招待され発表し、交流を深めた。'01年10月には、本分野の研究等を恒常的に行う研究組織、国際総合研究機構 (IRI) を創立。*ISLIS* より奨励発表賞と、優秀論文賞を受ける。

趣味は、自分でスポーツをすること(テニス、スキー、ウィンドサーフィン、パラグライダーは骨折と墜落でリタイヤー)、ハぼ碁、酒を少し飲み真剣に議論。

吉 福 康 郎

YOSHIHUKU YASUO

理学博士



1. 中部大学工学部理学教室 教授
〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200
電話(代) 0568-51-1111 Fax 0568-51-1642
E-mail: yosihuku@solan.chubu.ac.jp

日本バイオメカニクス学会
人体科学会(理事)
国際生命情報科学会 (*ISLIS*) (理事)

1944年2月滋賀県に生まれ、伊勢市で育つ。1967年東京大学理学部物理学科卒業、同大学院に進み量子力学の基礎的問題、特に「隠れた変数」を研究、1973年理学博士。1975年中部工業大学(現中部大学)講師、力学を身体運動に応用したスポーツ・バイオメカニクスを研究。主なテーマは格闘技、自転車。1984年日本高校野球連盟の専門委員として「飛ぶ金属バット」を力学的に解明。1987年から1年間、カルガリー大学客員教授、IOCの測定委員も務める。1985年より15年間自転車産業振興協会委員。1978年に大学にサイクリング部を創設、顧問として指導を続けている。

幼い頃から「死の恐怖」が強く、「生きる意味」を知りたいと渴望していた。「真理」に迫る道を科学に求め、物理学の道に進んだが、量子力学の不思議さに捕まって前進できなくなった。学生時代は、物理学だけでは心が満たされず、禅寺に1ヶ月籠もって座禅をしたり、森田療法も受けた。

30代に物理学は「生きる意味」を教えてくれない、と思い、スポーツ・バイオメカニクスに転向した。生まれつき弱かった体をサイクリングによって鍛え始めたこと、子供時代にいじめにあった経験から「強さ」にあこがれ、「強い人はなぜ強いのか、自分も強くなれるのか」という疑問に自ら答えを出したいと思ったことが動機であった。

40代半ばに自分の手から「気」が出ていることを発見、唯物論というパラダイムの変更を余儀なくされた。新しいパラダイムを見つけるため、また、健康法として実施していたヨーガと気功の研究をするため人体科学会と *ISLIS* にも入会した。現在、単に気や超常現象を研究するのではなく、「生きる意味を教えてくれる真理」を科学的に発見したいと願っている。

趣味は、自然農法による野菜作り。140坪の畑から、不耕起・無農薬・無化学肥料でおいしい野菜を自給している。

第 6 部

用語解説

(あいうえお順)

第6部 用語解説

アジュバント関節炎モデル

起炎物質のアジュバント投与により誘発された関節炎は慢性リウマチ性関節炎の動物モデルとされる。抗リウマチ薬、抗炎症薬等の評価に広く使われている。(青木孝志)

意念

心の持ちよう。(町好雄)

エドガー・ケイシー(1877~1945、米国)

普段は写真業を営む敬虔なクリスチャン。

催眠状態に入ると超人的な能力を発揮し、あらゆる難病に対して診断と治療法を与えることができたり、魂の記録(アカシックレコード)を読んで、依頼者の長所や短所、才能や弱点などを過去生をもとに解き明かすことができた、とされる人物。

彼の病気治療に関する原理は『ケイシー療法』という名前で親しまれる。

日本エドガー・ケイシーセンター<http://www.eccj.ne.jp/>より引用

(青木孝志)



NMR Nuclear magnetic resonance (核磁気共鳴)の略語

物質の状態を分析する一つの方法として用いられる。その原理は、外部磁場(NMR装置の超伝導磁石が発生する磁場)中に置かれたサンプル

核磁気モーメントのゼーマン分裂（磁気モーメントをもつ原子核のエネルギー準位が外部磁場により分裂すること）により生じたエネルギー準位間の共鳴遷移を利用したもので、一つの分光法（スペクトル表示法）である。この分光法は簡単に NMR とも呼ばれる。（青木孝志）

MRI



図2 . 正常MRI脳画像（T1強調）

磁気断層法とも呼ばれるが、高磁場の中においた元素から出てくる微弱電波を検出して画像化する。開発者は、2003年度のノーベル賞の荣誉に輝いた。原子の周りには電子が回っているため磁界が発生し、小さな棒磁石と同様の状態と考えることができる。通常、原子は、いろいろな方向を向いているため微小磁石の磁場は、相互にキャンセルされ検出できないが、高磁場の中でラジオ波を照射すると微小磁石は、次第に揃ってきて（resonance 共鳴という）、磁場を発生するようになる。ここでラジオ波を止めると微小磁石は、また、ばらばらの状態に戻ってゆく（緩和という）。この緩和の際の

磁場変化の強さと時間変化を測定することで目的とする原子の量を測ることができる。一般に、MRIでは、水素原子を測定するので水素の量（主に水分）や水素原子の存在様式（自由に動いているか固定されているか等）の情報を得ることができる。これを断層画像化すると詳細な人体組織構造を見ることができる(Magnetic Resonance Imaging)。画像の解像力は、約1 mmである。赤血球中のヘモグロビンの酸素化の程度も緩和に影響するので、これを指標にして活動している脳部位を画像化する f MRI (functional MRI) が開発されている。(伊藤正敏)

カラゲニン足蹠浮腫ラット

起炎物質のカラゲニンをラットの足皮下に投与し、炎症を惹起させたラットの炎症モデルをいう。(青木孝志)

眼磁界

眼から発する磁場で、その強さは、最大で約 2×10^{-10} テスラである。ちなみに地球の磁場は 1×10^{-4} テスラである。(青木孝志)

気功

中国で4000年の歴史を持つ伝統医学の一方法。その中には硬気功と言われる武術に応用した方法、軟気功と言われる正に医療に使う気功、その中でも自己で行う内気功、気功師から気をもらって治療する外気功がある。さらに特異機能も気功に含まれる。特異機能は超能力のことであるが、中国では気功の分類に入れられている。内功にも全く動きがない静功と動作を伴うために運動が入る動功がある。(町好雄)

強制水泳試験

小さな水泳プールの中にラットやマウスを入れて、壁面からはすべて這い上がれないようにする。1壁面まで泳ぐと方向を変えて別の壁面へと泳ぐことを続けるが、疲れると泳ぎを止め浮かんだまま静止し休憩する。しばらくするとまた泳ぐことを続ける。一定時間内において休憩している時間の和を量ることにより疲労、栄養学などの研究を行う。一種の運動負荷試験である。(青木孝志)

近赤外線測光法

近赤外線は生体組織、その中でも特に頭蓋骨を透過し易いという性質を持つ。また、血液中のヘモグロビンは酸素の脱着に対応して特長的な吸収帯を持つことが分かっている。従って、異なる近赤外線波長で吸光度を測ると脳内の総血流量や酸化型ヘモグロビンおよび還元型ヘモグロビンの変化が同時に測定できるので、脳内酸素代謝のようすがモニターできる。また、この近赤外線は脳の表面から数cmの深さまで入って表面で検出されるので、主として大脳皮質の脳活動を知ることができる。用いるレーザーの近赤外線の波長は780, 805, 830nmなどで、一定のアルゴリズムに従い光吸収から総血流、酸化型ヘモグロビン、還元型ヘモグロビンの変化を算出する。今までの研究結果からこの測定方法はさまざまな精神活動に対してかなり感度がよく、場合によっては脳波測定では分からない脳内活動についても情報を与えてくれる。例えば、暗算で1000から次々と7を引いていく時に、酸化型と還元型のヘモグロビンの相対変化は人により異なることがある。また、同じ人でも途中で数の法則を見つけて機械的に答えを出すようになると、変化のパターンが変わってくる。さらに、そろばんの有段者ともなるとほとんど自動的に計算しているようである。これは、同じ精神作業を行う時でも頭の使い方や慣れによって酸素代謝のようすが違うことを示している。この

ほかにも言語を用いて思考する場合や、音楽を聴いた時にはクラシックとロックでは左右の脳での反応が異なることなども測定から分かった。左右脳の働きの違いは、測定を額の左右で行うことで右脳と左脳に対応する前頭野の変化として知ることができた。現在は、78チャンネルまでの全脳的な分布で測定できる光トポグラフィーの装置も開発されている。最近注目されている機能的MRIも同様に脳内血流を測る方法であるが、装置が大がかりになり簡便ではなく、幼児には実際には使えない。(木戸眞美)

コヒーレンス

左脳と右脳の脳波がバラバラでなく互いに助け合って大きくなったり、小さくなったりする現象(干渉)の起こりやすさの程度を表す言葉。なお、コヒーレンス解析とは、複数の波形の間の位相差やその程度を評価する解析法である。(青木孝志)

サイトカイン

サイトカインとは免疫系の調節、炎症反応の惹起、抗腫瘍作用などに関する物質である。最近では細胞増殖、分化、抑制など生体の恒常性維持に重要な役割を果たす物質であることが明らかになった。サイトカインを標的とした治療法が考えられている。(青木孝志)

神経興奮電流

刺激によって神経細胞膜が興奮すると細胞膜に脱分極と呼ばれる現象がおこり、これによって局所電流が流れる。局所電流は隣の未興奮部を流れてそこを脱分極し、これが次々とおこって神経の膜を興奮(信号)が伝わっていく。この現象によって流れる電流を神経興奮電流という。(青木孝志)

心磁界

心臓から発する磁場で、その強さは、最大で約 5×10^{-11} テスラである。ちなみに地球の磁場は 1×10^{-4} テスラである。(青木孝志)

松果体

視床上部において第三脳室の後上壁が後方に突出した場所に位置し、メラトニンを分泌する。メラトニンは性腺を抑制する機能を持つ。交感神経を介して外界からの日照時間によってその機能が制御されている。一説には松果体細胞は気受容器ではないかとも言われるが定かではない。そこで武重(昭和大学元学長・生理学)は気功師からの気を照射したときに家兎(麻酔)の松果体細胞の自発放電に変化が現れるかどうか研究したところ、放電が見事に抑制されることを発見している。即ち、松果体細胞は気に反応することが証明された。(青木孝志)

生体電気インピーダンス

生体には電気を通す性質がある。抵抗Rと静電容量Cを組み合わせた等価回路で電気の通り難さが表現される。交流に対する電気の通り難さをあらわす量を生体電気インピーダンスという。汗腺活動・情動・自律神経活動などによって変化することが知られている。(青木孝志)

生物フォトン(バイオフィトン)

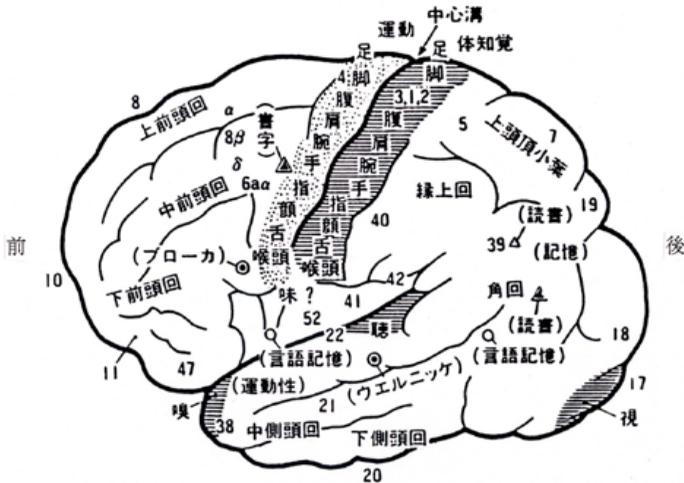
生物がその生命活動に伴い自発的に発する微弱な光をいう。ヒトからもこれが放出されている。(青木孝志)

大脳の機能局在

ヒトの大脳は右大脳半球と左大脳半球に別れ、両半球を繋ぐ脳梁を介して、情報をやりとりしている。図に大脳の左側面図を示した。

視覚野、聴覚野、皮膚からの感覚野など外からの情報が最初に入力される場所（斜線部）すなわち1次または低次の感覚野については非常によく場所の同定ができています。しかしそれらを総合して考えたり処理したりする高次機能についてはまだわかっていない部分の方が多い。

その中で、左半球言語野についてはかなり解明が進んでいる。前頭寄りのブローカ野はしゃべる等の運動性言語野、ウェルニッケ野は言語理解の中核、その他、書字、読字に関わる部位など、機能との対応が細かく明らかにされている。総合的に、左脳は言語に伴う論理思考、計算、分析などが主な機能であり、右脳は、空間認識、イメージ、音楽などの機能を担うとされている。（河野貴美子）



入静

気功を行った時、脳の活動が気功前と異なり、何も考えていない状態になり、この状態では大脳の活動が押さえられ、アルファ波が現れてくる状態（町好雄）

脳波 (Electroencephalography, EEG)

脳波とは、脳内に生じた電気活動を頭皮上における電位変動として総合的に計測されるものである。動物では頭蓋内からの計測も行うが、ヒトにおいては通常、頭皮上からの誘導である。

各種脳細胞中、精神活動に大きく関与しているのは、錐体細胞といわれる神経細胞と考えられているが、頭皮上から計測する脳波に個々の細胞内で発生する電位（活動電位（action potential））が寄与する率は小さい。律動的に変化する脳波の発生機序として有力なものは錐体細胞樹状突起（細胞体から伸びた枝）のシナプスにおける電位変化であろうというのが一般的である。シナプスとは、次の神経細胞への接合部分で、電位変化が伝わってくると、化学物質（神経伝達物質、いわゆる脳内ホルモン）を放出する。すると次の神経細胞の膜に変化が起こるとともに、シナプス電位が発生する。シナプス電位には興奮性のも（EPSP）と抑制性のも（IPSP）があるが、脳波律動の主体はEPSP（excitatory postsynaptic potential、興奮性シナプス後電位）であろうといわれている。

視床近辺の回路で形成されるリズムに数多くのシナプス電位が同期し加算されて、頭皮上からマイクロボルト単位の変動として計測されたものが脳波律動の主な成分であると考えられている。（河野貴美子）

脳波の計測

国際的に決められた（国際 10-20 法）頭皮上 12～16 か所に、直径 1

cm ほどの皿電極を導電性のペーストで貼り付けるのが臨床では一般的である。最近ではダイポール推定（信号の発火起点の同定）などの、より高い精度を必要とする計測用に、128 チャンネルなど多チャンネルの導出もある。耳朶等電位変化の影響を受けにくい箇所基準電極を置き、それとの間で頭皮上各電極における電位を導出する単極導出法（電位や振幅値などの分布図（トポグラフ）を描くにはこの方式）と、左右や前後の各電極間電位差を導出する双極導出法（てんかんなどの焦点検出に利便性）とがあるが、近年のデジタル脳波計では、さらに別個、基準電極を設けることにより、計測後に導出法を組替えることが可能となっている。（河野貴美子）

脳波の分類

脳波はその波の特徴により分類される。閉眼の安静時に後頭部を中心に現れる周波数 10Hz 前後の律動波が（アルファ）波である。振幅は個人差が大きいが、 $50\ \mu\text{V}$ 前後が平均的な値である。精神活動時には振幅が小さくなり、周波数が 20 Hz 前後の（ベータ）波となる。覚醒度が低くなると波は減少し、軽睡眠では 8Hz 以下の（シータ）波、深睡眠では 4Hz 以下の（デルタ）波が前頭寄りの頭頂から全頭にわたり出現する。周波数帯域の定義は人により多少異なるが、（2～4Hz）、（4～8Hz）、（8～13Hz）、（13～30Hz）というあたりが一般的で、帯域、帯域はさらに細かく分ける場合もある。（河野貴美子）

ベクトルポテンシャル

磁場の回転（磁場に回転演算子を作用させたもの）をベクトルポテンシャルという。物理的世界において重要な役割を演ずる物理量である。（青木孝志）

PET

ポジトロン断層法のこと、Positron (陽電子) を放出する性質を持つ放射性同位元素から出てくる(emission)放射線を検出することで、放射性同位元素の部位的濃度を断層像 (tomography) として画像化する装置 (tomograph) または、方法 (tomography) を指す。Positron 放出放射性同位元素には、 ^{15}O (質量数 15 の酸素の同位体で半減期は 2 分)、 ^{11}C (質量数 11 の炭素で半減期 20 分)、 ^{18}F (質量数 18 のフッ素で半減期 110 分) などがあり、半減期が短いことから放射線被曝が少ない利点がある。 ^{18}F -ブドウ糖は、がんの診断薬として保険適用になっている。脳血流 (^{15}O -生理食塩水を使用) やブドウ糖消費量 (^{18}F -ブドウ糖を使用) などを使用すれば、脳の活動を画像化することができる。最近、X 線 CT と PET を複合した装置 (PET/CT) が発売され究極の画像診断法として期待されている。Positron 放出放射性同位元素の産生には、円形加速器であるサイクロトロンを必要とすることから、一般病院への設置は、容易でない。画像の解像力は、約 5 mm であるが、動物用 PET では、2mm のものもある。(伊藤正敏)

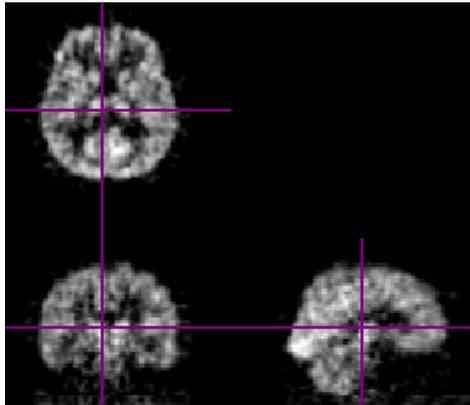


図1. 正常 PET 脳糖代謝画像

偏差

気功を指導者なくして勝手に学習すると、間違った方法で身体の調子を狂わせることがある。このことを偏差という。(町好雄)

ホメオスタシス (恒常性維持機能)

変化する外部環境の影響から生体の組織・細胞を保護するために、体内に安定した内部環境をつくりあげる自律的な保護機構をいう。例えば血液などの体液成分や体温の変化は、この働きによって一定限度内にとどめられる。重要な役割を演ずるのは自律神経系である。(青木孝志)

未病

2000年前の後漢の時代に、中国最古の医学書とされる「**黄帝内経**」にはじめて見られる言葉である。このなかで、「未病」とは「**病気に向かう状態**」を指し、この未病の時期を捉えて治すことの出来る人が医療者として最高人(聖人)であるとされている。病気になってから治すよりも、病気にならないようにする予防医学の重要性を説いたものと考えられる。(青木孝志)

脈診

西洋医学とはことなる漢方独自の脈による診断法である。手首の撓骨動脈上に人差し指、中指、薬指を同時に当てて、脈の状態(脈候)を診る。脈候は、浮、沈、大、小、緩、急、遅、数(さく)、滑(かつ)、シヨク、弦などに分類される。診断結果により漢方薬の処方となされる。(青木孝志)

劉 貴珍

気功は50数年前に吐納、導引、行気などの名前で呼ばれていたが、これらを気功と呼ぶと提案した人物。中国で最初の気功による病院である北戴河

気功康復医院を作った。(町好雄)

ロータロッド試験

直径数 cm のゴム製円筒を水平にして、これをモータにより強制的に回転させる。この回転棒（ロータロッド）上にラットやマウスをのせ、疲れて落下するまでの時間を量ることにより疲労、栄養学などの研究を行う。一種の運動負荷試験である。(青木孝志)

誘発脳波

神経細胞自体の活動により生ずる電位変化が頭皮上の脳波に寄与する割合は低いが、ある一定の刺激を繰り返し、刺激時点を起点として脳波を頻回加算すれば、背景にある脳波律動は相殺され、その刺激に反応する信号のみが協調される。これを誘発脳波という。誘発脳波に対して時系列で記録される脳波律動を背景脳波という言葉で区別することが多い。

誘発脳波には大きく分けて、(1) 刺激に直接対応する低次の神経活動を見るものと、(2) 高次の認知や判断を調べるものがあり、それぞれ刺激方法や潜時（刺激から反応までの時間）により、さらに細かく分類されている。

(1) の代表的なものは、

- a) **聴性誘発電位(AEP)** : クリック音などの音刺激を聞かせ、それに対する脳の反応を見る。短潜時（10 ミリ秒以内）のものは、ABR（聴性脳幹反応）といい、聴力検査、また脳死判定の補助手段としても使われる。長潜時記録は通常 500 ミリ秒あたりまでが範囲である。
- b) **体性感覚誘発電位(SEP)** : 上肢または下肢の感覚神経を刺激し、脳の体性感覚野の反応を調べるものである。
- c) **視覚誘発電位(VEP)** : フラッシュやチェックパターンなどを視覚刺激として負荷し、視覚野における反応を見るものである。

(2) は、事象関連電位といわれる。

事象関連電位(ERP)：数種類の信号から一つを弁別させたり、予告信号をあらかじめ与えて、反応させたりして、認知機能や判断、注意などの高次機能を調べるのに使われる。方法や潜時により名称がつけられており、主なものを挙げると、

- a) **P300**: テストには2種類の刺激信号をランダムに呈示し、呈示頻度の低い信号を数えさせるというオドボール課題が使われることが多い。そのとき、刺激から約 300 ミリ秒のあたりに現れる陽性電位を P300 といい、認知機能を調べる実験に多く使われる。
- b) **N100**: 上述の実験で現れる潜時約 100 ミリ秒の陰性電位で、選択的注意に関連して現れるとされる。
- c) **CNV (随伴性陰性変動)**: ボタン押しなどを求める命令刺激の前にその予告刺激を呈示すると、予告刺激に続いて緩慢な陰性電位が生じる。期待電位ともいわれ、注意、意欲、動機など脳の全般的な機能を反映すると考えられている。(河野貴美子)

インフォメーション

International Society of Life Information Science (ISLIS)

第17回生命情報科学シンポジウム 主催：国際生命情報科学会 (ISLIS)

開催日時：2004年3月13日・14日(土・日)

場 所：東京電機大学 神田校舎 (東京都千代田区神田錦町 2-2)

最寄駅 JR 御茶ノ水、神田
地下鉄 新御茶ノ水、小川町、淡路町、竹橋

本会は、生体機能、脳生理学、精神活動、東洋医学、伝統医学、生体放射、気、気功、精神集中、潜在能力、感覚外認識、精神的物理現象、生物特異機能などの実証的解明を行い、21世紀の科学・技術の新しいパラダイムを切り開き、人類の平和な文化と福祉に寄与することを目的とする学会です。

参加費： 会員 3,000円 (含：講演内容を掲載した学会誌代)
非会員 5,000円 (講演内容を掲載した学会誌代金 2,500円 別)
懇親会費 4,000円 **ISLIS**単行本発行祝賀、国際総合研究機構(**IRI**)との合同

時間：13日(土) 9:30 受付開始 10:00 開会の辞
14日(日) 8:30 受付開始 9:00 二日目開会の辞

特別講演	
13日(土)	日常歯科臨床では統合医療が、すでに実践されている 福岡 明 福岡歯科統合医療研究所 所長 ホリスティック医学のこれから 帯津 良一 帯津三敬病院 名誉院長
14日(日)	香りが脳機能に与える効果 古賀 良彦 杏林大学 教授 遠隔ヒーリング作用の研究の現状 木戸 眞美 東北学院大学 教授

一般研究演題	口頭発表 約14題
プラクティカルセッション(表演)	気功・ヒーリングなどの実演 数題を予定

シンポジウム実行委員長：東京電機大学 教授 町 好雄
〒101-8457 東京都千代田区神田錦町 2-2 電話：03-5280-3360 FAX：03-5280-3565

問い合わせ先：**ISLIS**本部事務局
〒263-8555 千葉県稲毛区穴川 4-9-1
放射線医学総合研究所 山本生体放射研究室内
電話：043-206-3066, FAX：043-206-3069
E-mail：islis@nirs.go.jp 場所：http://wwwsoc.nii.ac.jp/islis/



"Mind Body Science" 国際会議
物理・生理学的アプローチ
Joint with
第 18 回生命情報科学シンポジウム (国際版)
<http://yeics.yonsei.ac.kr/islis2004/>
(日本語ホームページ)
<http://www.soc.nii.ac.jp/islis/sjis/mbsifJ/MBSIForumJ.htm>

『こころと体の科学 国際会議』 この国際会議は、2002年8月に開催された"Human PSI Forum" 潜在能力の科学 国際フォーラム (千葉・幕張) の発展版として開催されます。多数のご参加をお待ち申し上げます。

開催期間：2004年8月26 - 29日(木 - 日)

開催場所：韓国 ソウル aTセンター <http://www.atcenter.co.kr/>

主催：韓国精神科学学会 Korean Jungshin Science Society

国際生命情報科学会 International Society of Life Information Science

メインテーマ：気功等における特殊生体機能への物理学的、生理学的なアプローチ、超心理学現象、予防医科学、代替・相補・伝統医療、統合医療、変性意識状態と特別な精神的活動

プログラム：海外招待者による特別招待講演、統合医療シンポジウム、応募研究発表(口頭・ポスター発表)、気功・武術など表演、韓国の研究機関訪問、韓国の伝統的な場所の視察・交流ツアー、レセプション

公用語：英語(日本語または韓国語も可)

参加費（2004年5月までの早期申し込み料金）

Special Presentation US\$ 200（懇親会費を含む。研究発表論文が予稿論文集に収録されます）

General Presentation US\$ 100（当日のポスター発表のみ。予稿論文集には収録されません。）

学 生 US\$ 60

懇親会 US\$ 40

*予稿論文集は Journal of ISLIS 特集号として出版されます。

第2次演題申込募集中（応募者の所属学会制限はありません。）

口頭発表・ポスター発表共に、500語の英文要旨をキーワードと共に、韓国または日本の組織委員会委員長に電子メールで送付。口頭発表の原稿締め切りは2004年5月末

組織委員会 委員長（韓国側）

Mignon Park（朴ミンヨン）, Ph.D.

韓国 延世大学 電子工学部 教授

E-mail: mignpark@yonsei.ac.kr

Address: Dept. of Electrical and Electronic Eng.,

Yonsei Univ. 120-749, Seoul, Korea

Phone: +82-2-2123-2868 Fax: +82-2-312-2333

組織委員会 委員長（日本側）

町 好雄, Ph.D.

東京電機大学 教授

電話 03-5280-3357 FAX 03-5280-3565

電子メール machi@d.dendai.ac.jp

『こころと体の科学 国際会議』 委員会・委員長・後援組織

2004年2月現在

	韓国側	日本側
大会委員長	Sae-il Chun (全世一) 韓国 Pochon CHA 大学 代替相補医療大学院 院長	渥美 和彦 日本代替・相補・伝統医療連合 会議 理事長 日本統合医療学会 代表 東京大学 名誉教授、鈴鹿医療科 学大学 前学長 日本学術会議 会員・第七部会 元部長
大会副委員長	Sung-bin Imm Professor, Myongji University	山本幹男 放射線医学総合研究所 主任研 究員
組織委員長	Mignon Park(朴ミンヨン) 韓国 延世大学 電子工 学部 教授	町 好雄 東京電機大学大学院 工学研究 科 教授
プログラム委員長	Kwang-sup Soh Professor, Seoul National University	小久保秀之 国際生命情報科学会 常務理 事・編集部長・事務局長
セッション委員長	Young Huh Korea Electrotechnology Research Institute	伊藤 正敏 東北大学 サイクロトロン RI セ ンター 核医学研究部 教授
運営委員長	Oan-suh Park 遠赤外線研究所	樋口 雄三 東京工業大学大学院 理工学研 究科 教授
財務委員長	Yong-ho Lee Professor, Pochon CHA 大学 代替相補医 療大学院	河野 貴美子 日本医科大学 情報科学センタ ー
出版担当	Jae-soo Kim Managerial Researcher KIST	小久保秀之 国際生命情報科学会 常務理 事・編集部長・事務局長
庶務担当	Gyu-suk Shim Plus Clinic	依田敦子 国際生命情報科学会 事務局員

	Seong-hee Kim Jungshin Science Society	委員長 近藤 鉄雄 (株)新時代戦略研究所 代表取締役 元 労働大臣、元 経済企画庁 長官、元 文部政務次官 元 農林水産政務次官、元 行 政管理政務次官 元 衆議院 科学技術委員長
顧問委 員会 (委員 を追加 予定)	委員(逐次 追加予定)	委員(逐次 追加予定) 土屋 喜一 早稲田大学 名誉教授 理工学総合研究センター 顧問 研究員 野辺地 篤郎 聖路加国際病院 元院長 国際総合研究機構(IRI) 副理事長 日本医学放射線学会 元会長・名 誉会員 ドイツ・レントゲン学会 名誉会 員 帯津 良一 帯津三敬病院 名誉院長 日本ホリスティック医学協会 会長
後援学 会	(逐次 追加予定)	特定非営利活動法人 国際総合研究 機構 日本代替・相補・伝統医療連合会議 日本未病システム学会 特定非営利活動法人 日本ホリス ティック医学協会 サトルエネルギー学会

1. **国際生命情報科学会**
International Society of Life Information Science (ISLIS)
<http://www.soc.nii.ac.jp/islis/index.htm>
2. 同学会誌 **Journal of International Society of Life Information Science**
<http://www.soc.nii.ac.jp/islis/journal.htm>
3. **国際総合研究機構 (IRI) 情報センター** (電話等 **ISLIS** に同じ)
International Research Institute (IRI)
<http://www.soc.nii.ac.jp/iri/index.html>
E-mail: iri@nirs.go.jp

国際生命情報科学会 (**ISLIS**) 等の事務所は、2005年3月頃に**移転の可能性**があります。移転先は本頁上部の1. または3. のホームページに決まり次第掲載します。

潜在能力の科学

Human Potential Science

ISBN 4-89114-041-0

発行日 2004年3月13日 初版 第1刷

監修 山本 幹男・伊藤 正敏・町 好雄・河野 貴美子・樋口 雄三・小久保 秀之
 国際生命情報科学会 (**ISLIS**) 常務理事会

発行 国際生命情報科学会 (**ISLIS**)

理事長 山本幹男

〒263-8555 千葉市稲毛区穴川4-9-1

独立行政法人 放射線医学総合研究所 山本生体放射研究室 内

電話 043-206-3066 Fax 043-206-3069

E-mail islis@nirs.go.jp

配本 財団法人 日本学会事務センター

〒113-8531 東京都文京区本郷 3-22-5 住友不動産本郷ビル7階

電話 03-5814-5811 FAX 03-5814-5822

E-mail sub-dom-rcpt@bcasj.or.jp

編集制作 国際総合研究機構 (**IRI**) 情報センター (連絡法 **ISLIS** に同じ)

印刷・製本 有限会社 B・D・S

〒264-0006 千葉市若葉区小倉台 4-8-7

電話 043-214-8551 FAX 043-214-8553

E-mail info@bunyudo.com

© Mikio Yamamoto, Masatoshi Itoh, Yoshio Machi, Kimiko Kawano,
 Yuzo Higuchi, Hideyuki Kokubo & Regular Board of Directors of
 International Society of Life Information Science (**ISLIS**), 2004